**ふかごろうキリスト教神学日記**

**第２.３版**

**深澤 信行 著**

目次

[**01.はじめに** 2](#_Toc43726979)

[**02.神学のよろこび** 4](#_Toc43726980)

[**03.キリスト教神学入門** 14](#_Toc43726981)

[**04.キリスト教神学第１巻** 62](#_Toc43726982)

[**05.キリスト教神学第２巻** 70](#_Toc43726983)

[**06.キリスト教神学第３巻** 75](#_Toc43726984)

[**07.キリスト教神学第４巻** 87](#_Toc43726985)

[**08.総説キリスト教** 102](#_Toc43726986)

[**09.神を愛するための神学講座** 110](#_Toc43726987)

[**10.組織神学** 111](#_Toc43726988)

[**11.キリスト教綱要第１篇** 119](#_Toc43726989)

[**12.キリスト教綱要第２篇** 125](#_Toc43726990)

[**13.キリスト教綱要第３篇** 138](#_Toc43726991)

[**14.キリスト教綱要第４篇** 150](#_Toc43726992)

[**15.総説現代福音主義神学** 155](#_Toc43726993)

[**16.クリスチャンであるとは** 156](#_Toc43726994)

[**17.神を知るということ** 157](#_Toc43726995)

[**18.キリスト者の完全** 158](#_Toc43726996)

[**19.この世界で働くということ** 159](#_Toc43726997)

[**20.キリスト者の標準** 161](#_Toc43726998)

[**21.ふかごろう神学・あとがき** 162](#_Toc43726999)

[**22.著者紹介** 169](#_Toc43727000)

**01.はじめに**

この『ふかごろうキリスト教神学日記』の著作権は、ふかごろうこと深澤信行が

保持していますが、自由に読んだりコピーしたり引用したり再配布してくださって構いません。

はじめに書いておきたいことがあります。

神学というものは、勉強しなくても良いものであるということです。

無理に勉強する必要はありません。

なので、この本も中身はすっとばして、「21.ふかごろう神学・あとがき」だけ読んでもらってもよいです。

「21.ふかごろう神学・あとがき」はなるべく読んで欲しいです。

「21.ふかごろう神学・あとがき」に、私、ふかごろうが一番言いたいことを書いておきました。

では、よろしくお願いします。

●キリスト教神学日記スタート

2006-03-31 23:41:44

はじめにこの日記では、私、ふかごろうが学んだキリスト教神学のことを書き残していこうと思います。

●本を出版しました。

2010-12-27 18:59:41 | お知らせ

私（ふかごろう、本名：深澤信行）は、本を出版しました。

「希望の光 ～統合失調症と信仰生活～」と言うタイトルの本です。

詳しくは下記のHPのトップページをごらんください。

↓

<http://fuka.moo.jp/>

**02.神学のよろこび**

●神学の学びスタート

2006-04-01 12:54:52

今日からいよいよ本格的に神学の学びに入っていきたいと思います。

学びに使用する本は以下の通りです。

『神学のよろこび』、アリスター・マクグラス著

↓

『キリスト教神学入門』、A・E・マクグラス著（アリスター・マクグラス著）

↓

『組織神学』、ヘンリー・シーセン著

↓

『神を愛するための神学講座』、水草修治著

↓

『キリスト教神学第１～４巻』、ミラード・J・エリクソン著

この順番で学びを進めて行きたいと思います。

------------------------------------

＜今日読んだ箇所＞

「神学のよろこび、アリスター・マクグラス著」：１～３８ページ

今日の箇所は、神学のイントロダクションです。

神学とは何か、このことについて簡単な説明が載っています。

神学とは、「神についての語り」だそうです。

あと、重要な神学者の名前が挙げられていました。

○トマス・アクィナス（１２２５年頃－７５年）

○ジャン・カルヴァン（１５０９年－６４年）

○カール・バルト（１８８６年－１９６８年）

○カール・ラーナー（１９０４年－８４年）

カルヴァンとバルトは聞いたことがありましたが、他の２人は初耳でした。

●神学者の代表的著作

2006-04-02 14:50:44

＜今日読んだ箇所＞

「神学のよろこび、アリスター・マクグラス著」：39～53頁

前回４人の神学者の名前を挙げたけど、今回は代表的な著作も記しておきます。

○トマス・アクィナス（１２２５年頃－７５年）

『神学大全』Toralith of Theology

○ジャン・カルヴァン（１５０９年－６４年）

『キリスト教綱要』Institures of the Christian Religion

○カール・バルト（１８８６年－１９６８年）

『教会教義学』Church Dogmatics

○カール・ラーナー（１９０４年－８４年）

『神学論叢』Theological Investigations

今日読んだ箇所は、信仰について書かれています。

印象の残った言葉は次のものです。

「信仰は理性を超えている。しかし理性に反するものではない」

●知的な理解だけでなく

2006-04-03 17:16:17

＜今日読んだ箇所＞

「神学のよろこび、アリスター・マクグラス著」：５４～５６頁

私は、キリスト教信仰に必要なものは、キリスト教に対する知的理解だけでなく、もっと他のものも必要だと思います。

回心といいますか、新生といいますか。

初めに、こういうものが必要になる場合が多いと思います。

ただ、両親がクリスチャンのクリスチャンホームに育った人などは、特に劇的な回心の経験はしない場合があるそうです。

神学者のミラード・J・エリクソン氏も、そういう劇的な経験はしなったそうです。

まあ、キリスト教に繋がっていく経験は皆それぞれ違うのかもしれません。

しかしながら、キリスト教信仰と言うものは、キリスト教の知的理解に留まるものではありません。

もっと全人格的なものです。

もちろん、キリスト教の知的理解という部分もおろそかにはできなと思います。

●全人格的

2006-04-04 16:20:27

＜今日読んだ箇所＞

「神学のよろこび、アリスター・マクグラス著」：５７～６６頁

昨日、私は、キリスト教信仰とは全人格的なものだと書きましたが、今日読んだ箇所に、「全人格的」という言葉が出てきました。

引用してみますね。

↓

「信仰は、神に対する信仰者の側の全人格的応答であり、逆に今度はキリストのほうでも信仰者に人格的に臨むようになるものなのです。」

まあ、信仰というものは、全人格的なものなのです。

知識だけじゃなく、感情や、心も含めて、全てで、神に応答すると言いますか、そのようなものなのです。

そのような信仰を持つと、キリスト（神）の方からも、人格的に接してくださると思います。

●太陽を見ることはできない

2006-04-05 13:24:23

＜今日読んだ箇所＞

「神学のよろこび、アリスター・マクグラス著」：６７～９８頁

今日読んだ箇所には、こんな感じの話が載っていました。

太陽は直視できません。

昼間の太陽を直視したら、失明してしまいます。

それと同じように神も見ることができません。

でも、黒いガラスを通して見ると太陽を見ることができます。

こういう感じの話が載っていました。

ここでは、暗に神学のことを黒いガラスに例えているように思えます。

はっきりとは書かれていませんでしたが。

--------------------------------------

ということで、今日までで、この本の３分の１ほどを読み終わりました。

ここまでで、５日間掛かったので、全部読み終わるのには、あと、１０日間ぐらい掛かるかな･･･。

ある程度のこの本を読んで分かったのだが、非常に読みやすい本です。

非常に分かりやすく書かれています。

ただ、翻訳の本なので、どうしても、日本語的に変と感じる場所もあります。

例えば、”反省”と言う単語が出てくるのですが、この単語が本来の反省の意味で使われていないような感じがします。

ちょっと、違和感がありました。

まあ、ただ、言いたいことは分かるので、いいですが。

●無カラノ創造

2006-04-06 13:18:34

＜今日読んだ箇所＞

「神学のよろこび、アリスター・マクグラス著」：９９～１２６頁

今日の箇所では、神の創造や啓示について書かれていました。

神の創造に関しては、２つの神学的な考え方があったようです。

１．元々なにかの材料のようなものがあってそこから世界を創造した。

２．無から世界を創造した。

今の時代に合わせて、コンピューター上の仮想空間を考えてみると、仮想空間上の物体と言うのは、元々存在していたわけじゃないです。

プログラムを実行して、ある時点から突然存在するようになったと言えます。

このことを当てはめて考えて見ると、やっぱり、無から世界を創造したと考えるのが妥当ではないかと思います。

あと、啓示について。

神を知る方法は、２種類あると書かれていました。

一つは、自然の秩序によって。

もう一つは、聖書によって。

それぞれ、なんとか啓示と言う名前が付けられていたと思いますが、この本では、そこまで解説されていませんでした。

●人であり神である

2006-04-07 18:31:39

＜今日読んだ箇所＞

「神学のよろこび、アリスター・マクグラス著」：１２７～１５８頁

今日の箇所は、イエス・キリストについて書かれていました。

今までの神学でかなりの論争があったようです。

特に、イエス・キリストが人であり神であると言うことについて、論争があったようです。

グノーシスと言う考え方もあったようですが、正統なキリスト教会は、イエス・キリストを人であり神であると言う認識をもつようになりました。

これは、一見、矛盾するような認識ですが、神に関しては人の理解の及ばない部分があると思います。

三位一体という教理も、３つで１つと言う、また、矛盾するような考え方ですが、これも、人間の通常の理解を超えている教理だと思います。

有限の世界に住む人間が、無限の世界に着座されている神を見る時どうしても、理解を超えた部分が出てくるのは仕方ないと思います。

逆にいえば、理論的整合性が取れている宗教と言う物は、人間が作り出したニセの宗教である可能性が高いとも思います。

●救い

2006-04-09 13:58:34

＜今日読んだ箇所＞

「神学のよろこび、アリスター・マクグラス著」：１５９～１８８頁

今日の箇所では、救いについて書かれていました。

救いに関しては、様々な方向から考えることができると思います。

１つは、罪の奴隷となった人間の解放を意味します。

他には、神の養子とされるという意味。

これは、神の栄光の傘下に入ることになります。

また、将来、天国に入れることの約束でもあります。

さらに、救いは、義と認められるということも意味します。

この義と認められると言うことは神学用語で義認といいますが、

「神との正常な関係に入ること」または、「神の側から見て正しいと認められること」を意味します。

●三位一体

2006-04-10 12:09:19

＜今日読んだ箇所＞

「神学のよろこび、アリスター・マクグラス著」：１８９～１９４頁

今日読んだ箇所には三位一体の教理が書かれていました。

この教理につまずく人も多いみたいですね。

エホバの証人と呼ばれる人達は、この教理を認めていないそうです。

三位一体の教理は教会の伝統の中、育まれてきました。

４世紀末には、この教理に関する議論が収束したようです。

この教理は、３つ段階を経て育まれてきました。

第一段階　イエス・キリストの完全な神性の承認。

第二段階　聖霊の完全な神性の承認。

第三段階　上記の中心となる見方を深く取り入れて意味を明確にし、さらにその

　　　　　相互関係を規定するような、三位一体論を定義づける定式化。

三位一体とは、簡単に言うと、父（神）、子（イエス・キリスト）、聖霊が、一体となっていると言う教理です。

●三位一体つづき

2006-04-11 15:00:05

＜今日読んだ箇所＞

「神学のよろこび、アリスター・マクグラス著」：１９５～２１８頁

今日の箇所は、昨日に引き続き三位一体の教理について説明がありました。

三位一体の教理にたどり着くには、まず、聖霊の神性を認めなければなりません。

聖霊の神性を認めることは、キリスト教の歴史の中、非常に慎重に行われました。

ナジアンゾスのグレゴリオス（３２９－３８９年）の言葉を引用してみましょう。

「旧約聖書は父を公に説教しているが、御子についてはずっとおぼろげに語っている。新約聖書は御子を啓示したが、聖霊の神性については暗示しているにとどまる。しかし今や、聖霊は私たちの内に住み、もっと明瞭に私たちに啓示されている。父の神性がまだ認められていないのに、御子を公に説教するのは適切ではなかったし、同じように、まだ御子［の神性］が認められていない以前に、聖霊を受け入れるのは適切ではなかった。・・・代わりに私たちは、段階を追って向上し・・・それぞれの部分で知識を増すことによって前進し、ますます明瞭となるようにすべきである。その結果、三位一体の光が輝くだろう。」（１９２頁から引用）

●教会

2006-04-12 17:46:12

＜今日読んだ箇所＞

「神学のよろこび、アリスター・マクグラス著」：２１９～２４８頁

今日の箇所には、教会について語られていました。

教会は、目に見える形での教会と、普遍的なキリスト教信仰者の全組織体と言う見えない形の教会があります。

あと、教会のあり方についてですが、教会にはクリスチャンしか存在しないのか、それとも、クリスチャンとノンクリスチャンが混ざり合っているのか。

この２つの考え方があります。

●天国

2006-04-14 14:15:32

＜今日読んだ箇所＞

「神学のよろこび、アリスター・マクグラス著」：２４９～２５２頁

天国に関しては、「今すでに」「まだ」と言う２つの言い方ができます。

『神学のよろこび』から引用してみましょう。

「ある意味で天国はまだ実現していませんが、別の意味でその力強い魅力は

すでに、ドラマチックで複雑な仕方で私たちに影響を及ぼしています。

一度はその展望に小躍りしますが、しかし同時に、まだ私たちがそこには

いないことを知って落胆するものです。」

●茶目っ気

2006-04-15 12:31:23

＜今日読んだ箇所＞

「神学のよろこび、アリスター・マクグラス著」：２５３～２８１頁

今日の箇所には、アリスター・マクグラスの茶目っ気とも思える記述がありました。

天国で復活した体は、何歳の状態なのか？とか。

天国では、皆裸なのか？とか。

動物に食べられて死んだ場合、復活はどうなるのか？とか。

あとがきにも書いてありましたが、このへんの記述は、アリスター・マクグラスの茶目っ気なのだろうと思いました。

それぞれの質問には、一応、答えのようなものが載せられていますが、それほど重要なこととは思えません。

と言うことで、今日でこの本読み終わりました。

本の内容は、ここで紹介したよりもっと奥深いのですが、詳しく紹介するのは大変なため、簡単に内容をピックアップして紹介しました。

もし、この本に興味を持ちましたら、実際に読んでみるといいと思います。

●ハッピーイースター

2006-04-16 16:14:00

今日はイースター（復活際）ですね。

イエス・キリストが復活したことを記念する日です。

今日は、世界中の教会で特別な礼拝がもたれることでしょう。

私も今日は、教会で礼拝することができました。

ハッピーイースター！！

ハレルヤ！！

今日は、神学書の解説はお休みさせていただきます。

**03.キリスト教神学入門**

●新しい本を読み始めます

2006-04-17 17:04:48 | キリスト教神学入門

＜今日読んだ箇所＞

「キリスト教神学入門、A・E・マクグラス著」：１～２０頁

今日から新しい神学書を読み始めます。

『キリスト教神学入門』と言う本です。

前回まで読んでいた『神学のよろこび』と同じ著者の本です。

この著者は、分子生物学で博士号を取っていると言うちょっと変わった人です。

普通、神学をやる人は、神学か哲学の博士号を取るんじゃないかと思いますが。

この人は、元々、分子生物学が専門で、博士号を取ってから、神学を本格的に学んだようです。

だから、科学とかにも精通していると思われます。

若い時は、マルクス主義に傾倒していたとのことです。

でも、キリスト教に改心したそうです。

「キリスト教神学入門」と言う今から読もうとしている本は、ページ数が804ページもある大著です。

本の値段も7500円もします。

しかしながら、キリスト教の神学を学び始めるなら、この１冊があればいいとのこと。

入門書としては、この本が最適とのこと。

この本は、神学に関してなにも知識を持っていない人を前提として書かれているとのことです。

だからこそ、こんなに分厚い本になったようです。

これから、一日、１０ページぐらいのペースで読んで行けば、約８０日間でこの本を読み終わることができるでしょう。

かなり長い時間が掛かるような気がするけど、本の厚さにひるまずに読み進めて行こうと思います。

●キリスト教神学思想史

2006-04-18 14:57:44 | キリスト教神学入門

＜今日読んだ箇所＞

「キリスト教神学入門、A・E・マクグラス著」：２１～３０頁

さて、今日からこの本の内容に入って行きましょう。

今日の箇所から、キリスト教神学思想史に入ります。

キリスト教に関する数々の問題は、すでに過去に論じられているわけですね。

その過去に、論じられていたことを参照すれば、多くのことを得ることができるでしょう。

まず、歴史の区分についてこの本には書かれていました。

１．教父時代（１００年頃から４５１年まで）

２．中世とルネッサンス（１０５０年頃から１５００年頃まで）

３．宗教改革とそれ以降の時代（１５００年頃から１７５０年頃まで）

４．近・現代（１７５０年頃から現在まで）

キリスト教学神学思想史は、この４つの時代に分かれるようです。

●教父時代の神学者

2006-04-19 16:59:40 | キリスト教神学入門

＜今日読んだ箇所＞

「キリスト教神学入門、A・E・マクグラス著」：３１～３６頁

今日から、キリスト教神学思想史の教父時代について書かれている部分を読んで行きます。

主要な神学者は、以下の６人です。

１．殉教者ユスティノス（１００年頃－１６５年頃）

２．リヨンのエイレナイオス（１３０年頃－２００年頃）

３．オリゲネス（１８５年頃－２５４年頃）

４．テルトゥリアヌス（１６０年頃－２２５年頃）

５．アタナシオス（２９６年頃－３７３年頃）

６．ヒッポのアウグスティヌス（３５４年－４３０年）

この６人の中で特に、アウグスティヌスが一番影響力の大きい神学者だったそうです。

アウグスティヌスは、３２歳になるまでキリスト教徒では無かったようです。

でも、劇的な回心を経験したそうです。

彼は、庭園で、子供達が「トレ、レゲ（手にとって読みなさい」と歌っているのを聞いたように思いました。

それが、神の導きであるように思えたアウグスティヌスは、手近にあった新約聖書を読んでみました。

その時、たまたま読んだ箇所が、ローマ人への手紙の次の言葉でした。

「主イエス・キリストを身にまといなさい。」

そのできごとによって彼は回心したそうです。

私も、３０歳を超えてからキリスト教に回心したので、親近感がわきます。

●新約聖書正典論

2006-04-22 15:17:11 | キリスト教神学入門

＜今日読んだ箇所＞

「キリスト教神学入門、A・E・マクグラス著」：３７～３８頁

今日の箇所では、新約聖書の正典としての範囲を決めたいきさつが簡単に書かれていました。

正典入りに関して、西方教会が難色を示したのはヘブライ人への手紙で、特定の使徒のものではないからでした。

東方教会が難色を示したのは、ヨハネの黙示録でした。

ただ、３６７年に回覧されたアタナシオスの第３９復活際書簡では、今日と同じ２７の新約聖書を正典的として確定しています。

●世俗文化との関係

2006-04-24 15:12:59 | キリスト教神学入門

＜今日読んだ箇所＞

「キリスト教神学入門、A・E・マクグラス著」：３９～４４頁

キリスト教神学と世俗文化との関係

キリスト者は詩や哲学や文学という古典世界の膨大な文化遺産をどの程度まで自分のものと出来るのか。

このことが、古代教会の論争の一つになっていました。

初期の見解は、殉教者ユスティノスから出されました。

ユスティノスは、神の知恵の種子は世界中に蒔かれていると考えました。

ということは、キリスト者は教会の外に福音を反映している要素を見出すことが出来るし、またそうすべきだと主張しました。

この見解に対して、古代の教会の反応は冷たいものでした。

この見解は、事実上キリスト教と古典文化を同一視していることになります。

次に、テルトゥリアヌスがこの見解に対して反対します。

彼は問いました。

アテネとエルサレムと何の関係があるのか、プラトンのアカデメイアが教会にとって何の役にたつか。

彼の見解はこうでした。

キリスト教は、そのような世俗の影響を避けることで自分自身の特色ある存在を守らなければならない。

次に、アウグスティヌスによって、最終的に教会に受け入れられた見解が示されます。

それは、「古典文化の批判的適用」と言われるべきものです。

出エジプトの時を思い起こして見ると、イスラエルはエジプトの偶像を後にしたもののエジプトの金銀は携えてきたのです。

それはそのような富をよりよく、また適切に用いるためであり、そのようにして富は以前よりも高次の目的に仕えるように開放されたのです。

同じように、古代世界の哲学と文化をキリスト者は、それが正しいと思われるところでは、自分のものにすることができます。

そしてそれをキリスト教信仰の大儀に仕えるようにさせることが出来るのです。

以上が、アウグスティヌスによる見解です。

●世界教会信条の制定

2006-04-26 15:00:54 | キリスト教神学入門

＜今日読んだ箇所＞

「キリスト教神学入門、A・E・マクグラス著」：４５～４６頁

＜世界教会信条の制定＞

信条というものは、特定のキリスト教の教派に関わるものではないそうです。

ある特定の教派に関わるものは、しばしば「信仰告白」という形でまとめられています。

信仰告白の例をあげましょう。

ルター派の「アウクスブルク信仰告白」

改革派の「ウェストミンスター信仰告白」

こういうものは、信条ではないそうです。

信条と言うものは、広く普遍的に、キリスト教の教派全体が認めるものです。

この本には、２つの信条が載っていました。

一つは「使徒信条」です。

「我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず。・・・」

この信条はクリスチャンなら誰でも知っているかもしれませんね。

礼拝で唱和しますものね。

この信条は、元々洗礼を受ける人が信仰を告白する時に唱えたものだそうです。

もう、一つの信条は、「ニカイヤ信条」です。

この信条は、名前はどこかで聞いたことがあったのですが、具体的な内容を知ったのはこの本を読んでからでした。

なるほど、こういう内容だったのだ、と分かりました。

このニカイヤ信条は、アレイオス主義がキリストを被造物と理解したのに対抗してキリストの完全な神性を主張しようとしたものだそうです。

●イエス・キリストの両性

2006-04-27 14:35:54 | キリスト教神学入門

＜今日読んだ箇所＞

「キリスト教神学入門、A・E・マクグラス著」：４７～４８頁

＜イエス・キリストの両性＞

イエス・キリストの両性と言うのは、イエス・キリストの神性と人性の両方のことを指しています。

つまり、イエス・キリストが神であり、また人であったと言うことです。

この教理が確立するまで様々な論争があったようです。

この本ではこの論争に関して、２つの学派、２つの論争、２つの公会議が紹介されていました。

１．学派

アレクサンドリア学派：キリストの神性を強調する。

アンティオキア学派：キリストの人性を強調する。

２．論争

アレイオス論争：

　a.アレイオス（250年頃～390年頃）の主張

　　　キリストは被造物の中では卓越しているとはいえ、被造物だ。

b.アタナシオスからの反論

　　　アレイオスのキリスト論は救済論的に見て不適切である。

　　　アレイオスのキリストは罪に堕ちた人類を贖うことが出来ない。

　　　アレイオス主義は異端である。

アポリナリオス論争：

　a．アポリナリオス（310年頃～390年頃）の主張

　　　キリストは完全に人間であったとみなされることはできない。

　　　キリストの場合、人間の霊は神のロゴスによって置き換えられた。

　　　キリストは、十全な人性を持たない。

　b．ナジアンゾスのグレゴリオスなどの反論

　　　アポリナリオスの立場では、キリストが人間の本性を完全に贖うことが出来ない。

３．公会議

ニカイヤ会議（３２５年）：

　イエスが父（神）と存在において一つ、あるいは、一つの本質であると主張した。

　カルケドン会議（４５１年）：

　　ニカイヤでの決定を確認し、キリストの人性について、

その後に起こった新しい論争に応えた。

●三位一体論、教会論

2006-04-29 17:21:12 | キリスト教神学入門

＜今日読んだ箇所＞

「キリスト教神学入門、A・E・マクグラス著」：４９～５０頁

＜三位一体論＞

イエス・キリストの両性の問題が決着すると、次に起こったキリスト教の教理の探求は、三位一体論でした。

三位一体論とは、神には３つの位格があり、この三つが等しく神であり平等であるということです。

この３つの位格は、父、子（イエス・キリスト）、聖霊のことです。

父と子が同等であるということは、ニカイア会議にいたるキリスト論論争を通じて確立されました。

聖霊の神性については、特にアタナシオスとカイサリアのバシレイオスの著作を通じて確立されることになりました。

三位一体論に関しては、この本の別のページで詳しく解説するとのこと。

＜教会論＞

西方教会では、教会の聖性の問題が論争になりました。

教会は、聖徒だけのものであるか、それとも、聖徒と罪人がまじりあった状態に留まるべきであるか。

この２つの考え方がありました。

アウグスティヌスは、後者のまじりあった状態を支持しています。

ちなみに、宗教改革の時にも、教会論に関わる問題が表面化したそうです。

●恩恵論

2006-05-03 14:33:29 | キリスト教神学入門

＜今日読んだ箇所＞

「キリスト教神学入門、A・E・マクグラス著」：５１～５７頁

＜恩恵論＞

この恩恵論というものは恵みについての教理です。

この”恵み”に対するものとして”行い”があります。

４１０年代にこのことに対する激しい論争がありました。

英国出身でローマを拠点としていた禁欲的な修道僧ペラギウスは、人間の道徳的責任の必要性を強く主張しました。

彼は、旧約聖書の律法やキリストの模範に照らして絶えざる自己改革の必要性を主張しました。

この人の主張は、”行い”に重点が置かれていると思います。

ペラギウスの主張は、キリスト教は自律の宗教だということです。

自律の宗教というのは、人間が自分の救いについて主導権を取れるという考えのことです。

それに対し、アウグスティヌスは、反論しました。

アウグスティヌスは、キリスト教的生活のあらゆる段階において、その初めから終わりまで、神の恵みこそが主導権を持つものだと主張しました。

人間は救いに向けての第一歩を踏み出すのに必要な自由を持っていません。

人間は堕落しており、その堕落からの救いは、神の恵みのみによって与えられるという考え方です。

また、アウグスティヌスは、この考え方を発展させました。

神は救われる者を「予め選択している」と言う考え方に発展させました。

これは、予定論と言われます。

新約聖書にも、この思想がほのめかされています。

●中世とルネサンス

2006-05-06 12:06:03 | キリスト教神学入門

＜今日読んだ箇所＞

「キリスト教神学入門、A・E・マクグラス著」：５８～６３頁

＜中世とルネサンス＞

前回までの箇所は、教父時代のものでしたが、今日から中世とルネサンスに入ります。

ヨーロッパの中世と言うと、多くのロールプレイングゲームで舞台となっていますね。

騎士とか勇者が登場する日本でもおなじみの世界観です。

中世とルネサンスの時代は、おおよそ１０５０年～１５００年だそうです。

ローマの陥落（４１０年）から、１０００年ごろまでを暗黒時代と言い、その後、中世が続きます。

中世とは、つまらない停滞していた時代とルネサンスの歴史家達から思われていたようです。

●ルネサンス、スコラ神学

2006-05-08 17:56:35 | キリスト教神学入門

＜今日読んだ箇所＞

「キリスト教神学入門、A・E・マクグラス著」：６４～６８頁

＜ルネサンス＞

ルネサンスとは、１４世紀および１５世紀イタリアでの文学と芸術の復興を指します。

イタリア・ルネサンスの世界観の中心を構成していたのが古代の文化的栄光への回帰であり、中世の知的業績の軽視でありました。

ルネサンスの人々の中世への理解は貧しく、中世は、古代文化の業績に比べれば取るに足らないものと考えていました。

＜スコラ神学＞

スコラ主義とは、1200年から1500年にかけての時期に栄えた中世の思想運動で、その強調点は信仰の合理的正当化と体系的提示でした。

スコラ神学の名前の由来は、当時有名だった中世の学校（scholae）の名前です。

その学校では、神学と哲学の問題が論じられていたのですが、しばしばその議論は複雑で、後の歴史家を驚かせ、また楽しませるものとなりました。

当時の人文主義者にとって、スコラ神学はくだらないことに思弁を働かせている不毛な営みだと思われていたようです。

具体的には、次のような論議が起こっていたようです。

「神は人になる代わりにキュウリとなることが出来たか」

「神は売春婦を処女にすることで、過去を取り消すことができるか」

このような議論は、人文主義者にとってくだらなく、馬鹿げていると思われたようです。

＜実在論と唯名論＞

初期のスコラ主義（1200頃-1350頃）においては実在論が支配的で、後期（1350頃-1500頃）は唯名論が支配的でした。

両者の違いについて。

例えば、ここに白い石が２つあるとします。

実在論は、この２つの石が体現している「白さ」という普遍的な概念の存在を肯定します。

しかし、唯名論は、普遍的な「白さ」の概念は不要だと主張します。

その代わりに、我々は個物にこそ集中すべきだと論じています。

ここにあるのは２つの白い石なのであって、「普遍的な白さの概念」を論じ始める必要はないというのです。

＜新しい道＞

「新しい道」という言葉は、かつて「唯名論」として知られていた思想活動を指す最もよい言葉として、当時広く受け入れられるようになりました。

●新アウグスティヌス学派

2006-05-10 14:45:45 | キリスト教神学入門

＜今日読んだ箇所＞

「キリスト教神学入門、A・E・マクグラス著」：６９頁

＜新アウグスティヌス学派＞

その後、「新しい道」への批判的な反応が登場しました。

これが、新アウグスティヌス学派です。

この学派のグレゴリウスは、アウグスティヌスの影響を受けた救済論を展開しました。

強調点は恵みの必要性や人間の堕罪と罪深さ、義認における神の主導権や神の予定に置かれています。

救いは全く初めから終わりまで神の業と理解されています。

「新しい道」の支持者は、人間が「最善を尽くす」ことで義認を始めることが出来るとしますが、グレゴリウスは神だけが義認を始めることが出来ると主張しました。

●人文主義（ヒューマニズム）

2006-05-11 17:01:17 | キリスト教神学入門

＜今日読んだ箇所＞

「キリスト教神学入門、A・E・マクグラス著」：７０頁～７５頁

＜人文主義＞

今では「人文主義（ヒューマニズム）」という言葉は、神の存在や有意義性の否定や、純粋に世俗的な見方をする世界観を意味するようになっています。

しかし、ルネサンスのころは、もう少し違った意味があったようです。

人文主義者達の中にも非常に宗教的な人もいたようです。

人文主義には、２つの側面があったようです。

一つは、古典語と古典文学の研究をした運動。

もう一つは、ルネサンスの新しい哲学を形成する一連の思想。

しかし、この２つの側面は、必ずしも人文主義を正しく言い表せていないようです。

人文主義は非常に多様で、人文主義の人の中には、プラトン主義の人もいればアリストテレス主義の人もいました。

また、人文主義の中には、反宗教的立場を取る人もいますが、多くのイタリアの人文主義者達は、宗教的でありました。

人文主義は、一貫した哲学、あるいは政治的な理念があったわけではないようです。

●アンセルムス

2006-05-12 18:06:02 | キリスト教神学入門

＜今日読んだ箇所＞

「キリスト教神学入門、A・E・マクグラス著」：７６頁

＜カンタベリーのアンセルムス＞

なんだか、本の内容がだんだん難しくなってきました。

今日の箇所では、カンタベリーのアンセルムスと言う人が紹介されています。

１０３３年頃～１１０９年の人だそうです。

この人は、２つの重要な論理を作ったそうです。

一つは、神の存在証明。

もう一つは、キリストの十字架上の死の合理的解釈。

神の存在証明は、「存在論的証明」として知られているもので、「それ以上に偉大なものが考えられないもの」と言う命題から導き出したものです。

彼は、合理的に論理を構築しており、スコラ神学の良い面が現れているようです。

●トマス・アクィナス

2006-05-16 13:48:47 | キリスト教神学入門

＜今日読んだ箇所＞

「キリスト教神学入門、A・E・マクグラス著」：７７頁

＜トマス・アクィナス＞

今日の箇所では、トマス・アクィナス（1225年頃～1274年）という人が紹介されていました。

彼が生まれたのはイタリアにあるロッカセッカ城だったそうです。

アクィノのランドゥルフ伯爵のいちばん末の息子であったそうです。。

「口のきけない牛」と言うあだ名が付けられていたそうです。

このあだ名から察するに太っていたのだろうと思います。

彼の主な著書：

「異教徒反駁大全」

「神学大全」

主要な論理：

・「５つの道」（神の存在証明）

・類比の原理（これは被造物を通して神を知るための神学的基礎となる）

・信仰と理性との関係

これらの論理は、この本の別の箇所で詳しく説明するとのこと。

●スコトゥス、ウィリアム

2006-05-17 14:22:27 | キリスト教神学入門

＜今日読んだ箇所＞

「キリスト教神学入門、A・E・マクグラス著」：７８～７９頁

＜ドゥンス・スコトゥス＞

スコトゥスは、１２６５年頃～１３０８年の人。

４３才で亡くなったようです。

短い生涯でした。

彼はケンブリッジ、オックスフォード、パリで教え、３種類の「命題集註解」を生み出しました。

スコトゥスは、アリストテレスの知の理論の擁護者でした。

中世の初期には、ヒッポのアウグスティヌスに由来する別の知の論理が支配していました。

スコトゥスは神の意思が神の知性よりも先行し、優位にあると考えました。

これが、「主意主義」と呼ばれるものです。

スコトゥスは、イエスの母マリアの無原罪の宿りの教理を擁護しました。

スコトゥスの影響は大きく中世の終わりにはマリアの「無原罪の立場」が支配的になりました。

＜オッカムのウィリアム＞

１２８５年頃～１３４７年の人。

この人は、多くの点でスコトゥスとかかわりのある議論のいくつかの流れを発展させました。

ウィリアムは、「主意主義」の立場を擁護しました。

また、彼は、２つの教えを主に残しました。

１．オッカムの剃刀

　これは、しばしば「倹約の原理」と呼ばれます。

　ウィリアムは、神学的にも哲学的にも単純さが徳であると主張しました。

　この剃刀は、絶対に本質的なもの以外のあらゆる仮説を排除します。

２．唯名論

　ウィリアムは唯名論の熱心な擁護者でした。

　西ヨーロッパでは、ウィリアムのおかげで「新しい道」の影響がしだいに

強くなっていきました。

●エラスムス

2006-05-18 20:01:28 | キリスト教神学入門

＜今日読んだ箇所＞

「キリスト教神学入門、A・E・マクグラス著」：８０～８１頁

＜ロッテルダムのエラスムス＞

この人は、１４６９年頃～１５３６年の人とのこと。

彼は、ルネサンスの人文主義者の中で最重要人物と見られているそうです。

彼は、ギリシャ語の新約聖書を初めて出版したそうです。

あと、アウグスティヌスの著作も出版したそうです。

他に「キリスト教戦士の手引き」と言う画期的な本も出版しました。

この本は、教会の改革は、教会が教父と聖書に立ち返ることによってなされる、と主張しています。

また、新約聖書は「キリストの律法」であり、キリスト者はそれへの従順に召されているとのこと。

そして、エラスムスは、良く聖書を読むことを薦めています。

そういう主張をしつつも、彼は、ただ、道徳的な決まりを外面的に守れば良いとはしませんでした。

彼は、聖書を読むことが読み手を変え、神と隣人を愛する新しい促しを与えると言う示唆を与えています。

＜十分の一を読み終わった＞

今日で、この本の約十分の一を読み終わりました。

長かった。

１ヶ月かかってしまいました。

この調子だと、全部読み終わるのに１０ヶ月ぐらいかかる計算になります。

一気に読めないことはないけど、一気に読むと頭に入りません。

なので、少しずつ読んでいます。

基本的に、一度、前日に読んで、その翌日にブログにアップする文章を作成しています。

つまり、一箇所ブログにアップするのに、２日間かけています。

１日の内で読んでアップするより、手間はかかりますが、良く覚えられるような気がします。

●神学的発展

2006-05-22 11:15:33 | キリスト教神学入門

＜今日読んだ箇所＞

「キリスト教神学入門、A・E・マクグラス著」：８２～８４頁

＜中世とルネサンスの神学的発展＞

１．教父の遺産の整理

暗黒時代が終わった時神学者達は、教父時代の神学からの前進をはかりました。

神学者達は、ヒッポのアウグスティヌスの充実した著作群に目を向けることになりました。

ペトルス・ロンバルドゥスの「命題集」は、主としてアウグスティヌスからの引用（「命題」）を批判的に纏めたものです。

２．神学における理性の役割の探求

この時代には２つの神学的主題がありました。

一つは、キリスト教神学の体系化と拡大の必要。

もう一つは、そのような神学に内在する合理性の証明の必要。

これらの必要を満たすために、その方法論が議論されました。

そして、哲学をその必要を満たすための道具として使うことになりました。

１３世紀に入り、アリストテレスの哲学が見直されました。

アリストテレスの哲学は、キリスト教神学を体系化させる最良の手段としての地位を獲得しました。

しかし、この流れに反対する勢力も現れました。

特に、この流れで問題になったのは、義認論です。

アリストテレス的な思想の立場から「報復的な義」と言うものが確立されていました。

この「報復的な義」においては、「義」とは「その人にふさわしいものを与える」ということです。

これに従えば、功績による義認の教理へと進むことになります。

義認は恵みによるよりは、その人間の資格によって起こるということになります。

マルティン・ルターは、アリストテレスに対してしだいに否定的になり、ついにスコラ神学的義認論を捨てることになりました。

３．神学体系の発展

この時代には、特にアウグスティヌスの神学を整理する必要が出てきました。

スコラ神学の特徴であるこの体系化への要求が洗練された神学体系を生み出しました。

この発展が最良の仕方で見られるのは、トマス・アクィナスの「神学大全」です。

●中世・ルネサンスの主要な神学的発展について

2006-05-23 15:43:49 | キリスト教神学入門

＜今日読んだ箇所＞

「キリスト教神学入門、A・E・マクグラス著」：８５～８８頁

＜中世・ルネサンスの主要な神学的発展について＞

○サクラメント論の発展

古代教会のサクラメント（聖礼典）についての議論にはあやふやな点があったようです。

サクラメントはどう定義されるか、サクラメントの中にはどれが含まれるか、とういう点があやふやでした。

この時期（中世・ルネサンス）にサクラメント議論が成熟し、教会内での合意が生まれました。

○恩恵論の発展

アウグスティヌスの遺産の中心的なものは、恩恵論です。

この時期（中世・ルネサンス）この恩恵論が体系化され発展しました。

このことが、宗教改革の下地になりました。

○救済の図式におけるマリアの役割

マリアに関する議論もこのころ白熱したようです。

マリアを特別な人と見なすか、普通の人と見なすか。

無原罪論と原罪論の２つの論理がありました。

○キリスト教神学の資料への直接的回帰

それまで、「ヴルガーダ」と呼ばれるラテン語の聖書を元に神学が発展してきましたが、この時代には、原典の聖書を直接研究することが始められたようです。

○ヴルガーダ訳批判

１．中世の神学の多くは結婚をサクラメントとして捕らえていました。

これは、ヴルガーダ訳で結婚をサクラメントであると述べていたためです。

ところが原典をあたってみると、サクラメントと訳されていた単語は、単に「神秘」と訳されることが分かりました。

２．ヴルガーダ訳は、イエスの伝道活動の最初の言葉（マタイ４：１７）を次のように訳していました。

「悔悛をせよ。天の国が近づいたから。」

この訳は、悔悛のサクラメントと直接の関係を持つように思えてしまいます。

ところが、これは、単に「悔い改めよ。天の国が近づいたから。」と訳すべきだと言う議論が起こりました。

３．ヴルガーダ訳は、天使ガブリエルはマリアに「恵みに満ちた方」（ルカ１：２８）と言っています。

これだと、マリアが恵みで満たされた貯蔵タンクで、そこから必要に応じて恵みを引き出せるようにも思えてしまいます。

ところが、この箇所は、単に「恵まれた方」と訳すべきと指摘されました。

●ビザンチン神学

2006-05-24 18:19:54 | キリスト教神学入門

＜今日読んだ箇所＞

「キリスト教神学入門、A・E・マクグラス著」：８９～９４頁

＜ビザンチン神学＞

中世及びルネサンスの時代、ビザンチン神学と呼ばれるものが登場しました。

このビザンチン神学と言う名前は、ギリシャの都市ビザンチウムに由来します。

ビザンチン神学の特徴として、救済を神化と言う視点から見たという部分があげられます。

また、ビザンチン神学の神学者達は、西方カトリック教会に現れてきた煉獄の概念に当惑したようです。

ビザンチン神学は、キリスト教信仰の体系的形成には特に関心を払っていませんでした。

だから、ビザンチン神学にとっては、「組織（体系的）神学」と言うのは異質なものでした。

●宗教改革とそれ以後の時代

2006-05-25 12:49:44 | キリスト教神学入門

＜今日読んだ箇所＞

「キリスト教神学入門、A・E・マクグラス著」：９５～１０１頁

＜宗教改革とそれ以後の時代＞

この時代は、１５００年から１７５０年頃だそうです。

宗教改革をした中心人物：

マルティン・ルター

フルドリヒ・ツヴィングリ

ジャン・カルヴァン

私は、ルターとカルヴァンは以前から聞いたことがありました。

ルターの名前を初めて聞いたのは中学生のころの歴史の授業かもしれません。

それだけルターと言う人は、歴史的に重要な人なのでしょう。

宗教改革は、最初、ドイツとスイスで起こったようです。

最初この両者の運動は関係無かったようです。

ドイツの方がマルティン・ルターで、スイスの方がジャン・カルヴァンだそうです。

話は関係ないですが、以前、カトリックの人がジャン・カルヴァンの像を見てダースベイダーに見えると言っておりました。

宗教改革によってプロテスタントが生まれたのだが、この運動で、カトリック内部の改革も行われたようです。

＜ルター派宗教改革＞

主にドイツで行われました。

主な人物は、マルティン・ルターです。

ルター派の宗教改革は当初あまり注目されていませんでした。

しかし、１５１７年１０月３１日に「九十五箇条の提題」を張り出してから注目を集めるようになりました。

この張り紙は、カトリックの贖宥券（免罪符）の販売に対しての批判の意味があったようです。

免罪符を買うことによって罪が赦される、と言う考えにルターは批判したようです。

この「免罪符を買うことによって罪が赦される」という考え方は、誤解だったようです。

カトリックとしては、そのようなつもりで、免罪符を発行したのではありませんでした。

＜カルヴァン主義宗教改革＞

主にスイスで行われました。

主な人物は、ジャン・カルヴァンです。

ジャン・カルヴァンは、「キリスト教綱要」や「ハイデンベルク信仰問答」を書きました。

●アナバプティスト、カトリック宗教改革

2006-05-26 15:12:40 | キリスト教神学入門

＜今日読んだ箇所＞

「キリスト教神学入門、A・E・マクグラス著」：１０２～１０３頁

＜宗教改革急進派（アナバプティスト）＞

「アナバプティスト」とは、再洗礼派と言う意味です。

責任ある個人として公に信仰を告白する者だけに洗礼を授けると言う主張をしました。

だから、幼児洗礼は無効としたようです。

１５２０年のチューリッヒでこの派が生まれたようです。

他の特徴としては、外的権威への一般的不信、財産の共有、平和主義と無抵抗の強調があったようです。

＜カトリック宗教改革＞

トレント公会議（１５４５年～）の後、ローマ・カトリックでは、教会内での信仰の復興が起こったようです。

この改革は、プロテスタント宗教改革の反動で起こりました。

この改革の結果、人文主義者やプロテスタントから出されていた改革の要求の背後にあったさまざまな問題が解決されました。

●宗教改革の神学者

2006-05-29 20:43:54 | キリスト教神学入門

＜今日読んだ箇所＞

「キリスト教神学入門、A・E・マクグラス著」：１０４～１０７頁

＜宗教改革の神学者＞

今日は、宗教改革の主な神学者を紹介します。

＜マルティン・ルター＞

1483年～1546年の人です。

マルティン・ルターは、エアフルト大学で教育を受けました。

その後、ヴィッテンベルク大学の聖書学の教授となりました。

ルターは、１５１７年の『九十五箇条の提題』によって人々の注目を集めました。

その後、ライプツィヒ討論があり、これによりルターは、スコラ主義の徹底的な批判者としての評価を確立しました。

ルターは、福音が制度的教会の虜になってしまっていると主張しました。

ルターによると中世の教会は、司祭とサクラメントの複雑な体系に福音を封じ込めてしまったとのことです。

ルターの著作『キリスト者の自由』では、義認信仰について深く語っています。

＜ジャン・カルヴァン＞

1509年～1564年の人です。

カルヴァンは、スコラ主義が支配的なパリ大学で学びました。

その後、人文主義的であったオルレアン大学に移りました。

２０代の半ばに回心を経験し、パリでの改革運動との結びつきを深めました。

カルヴァンは、宗教改革の第２世代に当たる人で、体系的な神学の必要性によく気が付いていました。

彼は、その必要に応じ「キリスト教綱要」を著作しました。

＜フルドリヒ・ツヴィングリ＞

1484年～1531年の人です。

彼は、キリスト教的人文主義に興味を寄せました。

彼は、初期の宗教改革において、東部スイスでは、重要人物でした。

●宗教改革時の神学的発展

2006-06-01 12:13:27 | キリスト教神学入門

＜今日読んだ箇所＞

「キリスト教神学入門、A・E・マクグラス著」：１０８～１０９頁

＜宗教改革時の神学的発展＞

○神学の資料

宗教改革主流派の関心は、新しいキリスト教の伝統を打ち立てることではなく、既存の伝統の刷新・修正でした。

ルターやカルヴァンは、キリスト教神学が聖書の基づくものであると主張して、聖書への回帰の必要を説きました。

「聖書のみ」という標語が改革者達の特色となりました。

聖書に基づいていることが証明出来ない信仰の事柄は、排除されるか、誰をも拘束しないものとされるべきと主張しました。

また、教会における聖書の公式の位置が新たに強調されるようになりました。

○恩恵論

宗教改革初期にはマルティン・ルターの個人的問題意識が支配的でした。

ルターは、自分の言葉に耳を傾ける人々に信仰義認の教理を説きました。

「どのようにして、恵み深い神を見出すか」という問い、また「信仰のみ」という標題が、西ヨーロッパ世界に広く響き渡りました。

○サクラメント論

１５２０年代までに改革者たちの間では、サクラメントは神の見えない恵みの外的しるしであるという理解が確立していました。

この理解がサクラメントと義認論との結びつきを生み出しました。

改革者達とカトリックの間で、サクラメントの数と本質について激しい議論が起こりました。

●神学的文書の発展

2006-06-03 14:13:25 | キリスト教神学入門

＜今日読んだ箇所＞

「キリスト教神学入門、A・E・マクグラス著」：１１０～１１２頁

＜神学的文書の発展＞

宗教改革の時、下記の３種類の神学的文書が整えられました。

○信仰問答

○信仰告白

○組織神学の書物

それぞれについて順次説明します。

＜信仰問答＞

1528年ごろ、ルターは、ルター派教会を巡回したそうです。

ところが、それらの教会の牧師や信徒がキリスト教の教えを理解していなかったそうです。

これにショックを受けたルターは、一般信徒向けに、信仰問答と言うものを作成しました。

この信仰問答と言うのは、問いと答えが並べて書いてあるものです。

例をあげます。

問　洗礼とは何ですか。

答　洗礼とは、単なる水だけではなく、神の命令に含まれ、神のみことばと結びついた水です。

こんな感じです。

ふと思ったのだけど、この例文は、日本語が変に思えます。

なんか意味が通らないような気がします。

少し変だと思います。

信仰問答には、以下のようなものがあります。

『大教理問答』ルター作

『小教理問答』ルター作

『ハイデルベルク信仰問答』←これは有名。誰の著作か良く分かりませんでした。

私はハイデルベルク信仰問答を一度読んでみたいと思いました。

神学を勉強する前にハイデルベルク信仰問答を勉強した方が良かったかもしれませんね。

＜信仰告白＞

信仰の考え方の基本となるもの。

信仰の考え方の基本になるものは、聖書、信条、信仰告白の３つがあります。

そのうちの一つ。

＜組織神学の書物＞

次回、簡単に説明します。

＜本の読む順番を変えようと思う＞

私は、最初、以下の順番で読もうと思っていました。

　『神学のよろこび』アリスター・マクグラス著

　　　↓

　『キリスト教神学入門』A・E・マクグラス著（アリスター・マクグラス著）

　　　↓

　『組織神学』ヘンリー・シーセン著

　　　↓

　『神を愛するための神学講座』水草修治著

　　　↓

　『キリスト教神学第１～４巻』ミラード・J・エリクソン著

でも、次のような順番に変更しようと思います。

『神学のよろこび』アリスター・マクグラス著

　　　↓

　『キリスト教神学入門』A・E・マクグラス著（アリスター・マクグラス著）

　　　↓

　『キリスト教神学第１～４巻』ミラード・J・エリクソン著

　　　↓

　『組織神学』ヘンリー・シーセン著

　　　↓

　『神を愛するための神学講座』水草修治著

エリクソン先生の本を先に読みたくなってしまいました。

●組織神学の書物、宗教改革後

2006-06-06 14:55:20 | キリスト教神学入門

＜今日読んだ箇所＞

「キリスト教神学入門、A・E・マクグラス著」：１１３～１２９頁

＜組織神学の書物＞

宗教改革の神学を体系的に提示する必要に応じるため作成されました。

カルヴァンの「キリスト教綱要」が有名です。

最初この本は、６章しかなかったが、最終版では、８０章にまで拡張されました。

＜宗教改革以後の動き＞

宗教改革に続く時期にはプロテスタントでもカトリックでもそれぞれの運動の内部で神学的定着化が起こりました。

この時期プロテスタント内部では、「正統主義」と知られる時代が幕を開けました。

この時期、ピューリタニズムが生まれました。

ビューリタニズムは、キリスト教の教理の霊的、牧会的適用を主張しました。

プロテスタントは、ルター派と改革派（カルヴァン主義）に別れたようです。

ルター派と改革派の違いは、予定論にありました。

●近・現代

2006-06-08 14:48:11 | キリスト教神学入門

＜今日読んだ箇所＞

「キリスト教神学入門、A・E・マクグラス著」：１３０～１３４頁

＜近・現代＞

今までは、宗教改革とその後の時代を見てきましたが、今日から近代・現代のキリスト教神学の動きを見て行きたいと思います。

この時代は、この本では、１７５０年頃から現在までとしています。

＜啓蒙主義＞

まず、この時代の最初に起こったのは啓蒙主義の運動です。

啓蒙主義と言う言葉は、１９世紀の終わりごろから使われだしたようです。

その啓蒙主義の源流は、１７２０年から８０年までの思想にあるようです。

どういう運動だったのか、説明しましょう。

個人や社会を過去の抑圧の下に置いていたとみなされた古い神話を打破しようとして、理性を自由に、建設的に用いること。

啓蒙主義を表す言葉として、「理性の時代」や「合理主義」があったようです。

ただ、これらの言葉は、啓蒙主義を表すのには、的確では無かったようです。

啓蒙主義に影響を与えた有名な哲学者としては、デカルトがいますね。

「我思う、ゆえに我あり。」コギト　エルゴ　スム

デカルトの有名な言葉です。

●啓蒙主義による批判

2006-06-10 14:57:35 | キリスト教神学入門

＜今日読んだ箇所＞

「キリスト教神学入門、A・E・マクグラス著」：１３５～１３６頁

＜啓蒙主義による批判＞

伝統的キリスト教に対する啓蒙主義の批判が起こりました。

この批判は人間理性の万能と言う原理に基づいています。

この批判は幾つかの段階があります。

まず、キリスト教信仰は合理的であって、批判的検証に耐ええると言う主張がありました。

この主張は、ジョン・ロックとドイツの初期ヴォルフ学派の中に見られます。

キリスト教は、自然宗教を合理的に補完するものです。それゆえ、神の啓示という考えは維持されました。

次に、キリスト教の基本思想は合理的であって、理性そのものから導き出されたという主張がありました。

この主張は、啓示の思想を持ち出す必要はなくなります。

キリスト教は本質的に自然宗教の再発布ということになります。

キリスト教は、自然宗教の一例に過ぎないということになります。

さらに、第３の主張として、次のようなものがありました。

啓示を判断する理性の能力の肯定。

批判的理性は万能であるから、これがキリスト教の信仰や実践を吟味する究極の資格を持つと主張されました。

そして、その吟味を通して非合理的な要素や迷信的な要素を排除しようとしました。

●啓蒙主義による批判２

2006-06-14 15:53:44 | キリスト教神学入門

＜今日読んだ箇所＞

「キリスト教神学入門、A・E・マクグラス著」：１３７～１４０頁

＜啓蒙主義による批判２＞

○奇跡の否定

啓蒙主義者達の一部は、キリスト教の奇跡を否定しました。

イエス・キリストが十字架に付けられ死んで、その後復活した、というキリスト教の中核となる奇跡も否定しました。

○啓示に対する批判

元々、キリスト教においては、自然的な神知識を認める一方、それを補完する特別な啓示が必要とされてきました。

しかし、啓蒙主義者達は、その特別な啓示そのものを疑問視しました。

啓蒙主義者達は、歴史を軽視し、理性を重要視しました。

そのため、歴史に残っているような啓示と言うのは起こりえないと思ったようです。

○原罪の教理

啓蒙主義者達にとって原罪の教えは、人類を抑圧するものだと考えました。

そして、原罪の教えから人類を解放すべきだと考えました。

本来キリスト教では、原罪から人々を救うのですが、その原罪の教えそのものが抑圧の原因になっていると考えたのです。

○悪の問題

神の善い全能性と悪の存在は、矛盾するのではないか、との主張が啓蒙主義者から起こりました。

○聖書の地位と解釈

啓蒙主義者達は、聖書は特別な本ではなく、他の多くの本と同じようなものだと主張しました。

そして、聖書には、さまざまな矛盾が含まれていると主張しました。

○イエス・キリストの存在と意義

啓蒙主義者達は、史的なイエスの探求をしました。

つまり、イエスは、存在したのであるが、イエスは、善良な有名で素朴な教師であり、それが本当の姿であって、多くの奇跡などは、後々の創作であるということです。

●ロマン主義

2006-06-16 12:19:37 | キリスト教神学入門

＜今日読んだ箇所＞

「キリスト教神学入門、A・E・マクグラス著」：１４１～１４４頁

＜ロマン主義＞

今日の箇所は、私の好きなロマン主義です。

啓蒙主義が理性に主体を置いたとすると、ロマン主義は感情に主体を置いたと言えます。

１８世紀の最初の１０年において、合理主義の不毛さへの不安が増大し、これがロマン主義の発生へと繋がって行きました。

理性は、一度は解放者と見られたものの、精神を奴隷化するものとしだいにみなされるようになって行きました。

ロマン主義は、伝統的なキリスト教教理と啓蒙主義の合理主義的で道徳的な平凡さとの両者に対しての不満の反動の思想でした。

●マルクス主義

2006-06-20 13:06:35 | キリスト教神学入門

＜今日読んだ箇所＞

「キリスト教神学入門、A・E・マクグラス著」：１４５～１４７頁

＜マルクス主義＞

今日の箇所にはマルクス主義が載っていました。

これは、皆さんご存知かもしれませんね。

近年まであった、共産主義や社会主義の国の元々の思想です。

マルクス主義の根本は、唯物論にあります。

だから、神とかそういったものは存在しないと考えるのです。

それで、人の力で物質を上手に分けて貧富の差を無くして行こうとしたのです。

まあ～、このマルクス主義の行き着いた結果は、新たな権力構造を生み出し、

結局別の人々への富の集中を招いただけでしたね。

しかも、悪いことに、この主義を採用した国は、ほとんど経済が疲弊してしまいました。

やっぱり、神抜きの考え方には無理があるような気がします。

ちなみに、マルクス主義を発展させた人にレーニンがいます。

マルクスレーニン主義と言う言葉もあります。

マルクスは、ドイツ人でしたが、レーニンはロシア人でした。

私は、レーニンの唯物論という論文を少しだけ読んだことがあります。

難解だったような覚えがあり、途中までしか読めませんでした。

●リベラル

2006-06-25 12:55:59 | キリスト教神学入門

＜今日読んだ箇所＞

「キリスト教神学入門、A・E・マクグラス著」：１４８～１５１頁

＜リベラル（自由主義プロテスタンティズム）＞

今日は、自由主義プロテスタンティズムの箇所を読みました。

これは、一般に”リベラル”と呼ばれる教派のことでしょう。

このリベラルと言うのは、古来のキリスト教の教派に対し横断的に存在するようです。

例えば、バプテストと言う教派がありますが、バプテストの中に福音派とリベラル派の両派が存在するようです。

私は、バプテストは、ずっと福音派の一派かと思っていましたが、そんなことは無かったようです。

●モダニズム

2006-06-28 16:40:34 | キリスト教神学入門

＜今日読んだ箇所＞

「キリスト教神学入門、A・E・マクグラス著」：１５２～１５４頁

＜モダニズム＞

これは、私は初耳のような気がします。

以前、神学書で目にしたこともあるかもしれないけど、記憶に残っていません。

ポストモダニズなら聞いたことがあります。

このモダニズムと言うのは、伝統的なキリスト教教理、特にキリスト論や救済論に関して、批判的懐疑的態度をとったそうです。

なんだか、前回紹介したリベラルと似ているような気がします。

この運動は急進的な聖書批評に対して肯定的な態度をとり、信仰に対し神学的であるよりも倫理的な次元を強調しました。

●近・現代の状況

2006-06-29 10:42:50 | キリスト教神学入門

＜今日読んだ箇所＞

「キリスト教神学入門、A・E・マクグラス著」：１５５～１６２頁

＜新正統主義＞

自由主義神学は、第一次世界大戦の勃発により、幻滅をあじわされることとなりました。

多くの人が自由主義神学は、キリスト教を神中心であるよりも人間中心してしまったと主張しました。

そして、戦争がこのような神学の行き方の信頼性を打ちこしたのだと論じられました。

そこで、登場したのが、カール・バルトです。

彼は、新正統主義の思想を体系的に説き明かしました。

バルトは、イエス・キリストにおける神の自己啓示を真剣に受け取る必要があると主張しました。

＜ローマ・カトリック＞

近・現代のローマ・カトリックの動きをごく簡単に説明します。

ローマ・カトリックは、ロマン主義の観念論に深く動かされました。

ロマン主義運動は、カトリックの信仰と実践が持つ、その経験の側面も含めた多くの面に対する関心を再び目覚めさせました。

それは、カトリック・チュービンゲン学派の興隆と繋がりました。

そして、第二次世界大戦後、ローマ・カトリックは、神学が刷新されることとなります。

＜東方教会＞

近・現代の東方教会の発展した地域は、イスラム教勢力に占領されたり、また、ロシアでは共産主義の配下になってしまったりしました。

近年、ようやく、復興の兆しが見えてきたようです。

＜フェミニズム（女性神学）＞

これは、昔、「女性解放運動」と呼ばれたものです。

キリスト教には、女性を差別する教えがあるとの主張などがありました。

●ポストモダニズム

2006-06-30 10:31:36 | キリスト教神学入門

＜今日読んだ箇所＞

「キリスト教神学入門、A・E・マクグラス著」：１６３～１６５頁

＜ポストモダニズム＞

今日は、ポストモダニズムについて書かれている箇所を読みました。

これは聞いたことがあります。

まず、モダニズムとポストモダニズムの対応表を示しますね。

○モダニズム　：　ポストモダニズム

　目的　：　遊び

　計画　：　偶然

　階層制　：　無政府状態

　集中化　：　拡散

　選択　：　組み合わせ

---------------------

モダニズムとポストモダニズムの対応はこのような感じになります。

モダニズムが一極集中化し組織化するのに比べ、ポストモダニズムは、拡散、無秩序化する考えのようです。

宗教に関して言えばポストモダニズムは、多元主義であり、相対主義であります。

●解放の神学、黒人神学

2006-07-01 12:32:59 | キリスト教神学入門

＜今日読んだ箇所＞

「キリスト教神学入門、A・E・マクグラス著」：１６６～１７０頁

＜解放の神学＞

この神学は抑圧に対する神学です。

フェミニスト神学も解放の神学の一つと言えます。

この解放の神学は、主にラテン・アメリカで育って行きました。

この神学は、為政者ではなく、その下に置かれる弱者のための神学のようです。

この神学は、マルクス主義の影響を受けているようです。

マルクス主義は、唯物論を元にしているので、キリスト教とは根本的には合いませんが、その影響を受けたようです。

＜黒人神学＞

この黒人神学は、黒人のための神学です。

黒人神学の主張者の中には、イエス・キリストが黒人だったと言う者もいるそうです。

後々、黒人神学は、解放の神学の影響も受けたそうです。

●ポストリベラリズム

2006-07-05 16:16:32 | キリスト教神学入門

＜今日読んだ箇所＞

「キリスト教神学入門、A・E・マクグラス著」：１７１～１７３頁

＜ポストリベラリズム＞

今日の箇所にはポストリベラリズムが出てきました。

こんな運動あったことは、知りませんでした。

ポストリベラリズムは、「普遍的合理性」による伝統的啓蒙主義の立場と全人類に共通の直接的宗教経験という自由主義の仮説を退けます。

ポストリベラリズムは反基礎的（知識の普遍的基礎という考えを退ける）であり、共同体的（個人を優先するよりも、共同体の価値や経験や言語に依拠する）であり、そして、歴史主義的（経験と思想の形成における伝統と歴史的共同体との関係との重要性を強調する）なのであります。

なんだか、難しいな～。

●福音派

2006-07-23 21:02:55 | キリスト教神学入門

＜今日読んだ箇所＞

「キリスト教神学入門、A・E・マクグラス著」：１７４～１７５頁

最近、引越しやらなんやらでごたごたしていたので、久しぶりの更新になります。

では、書きます。

＜福音派＞

今日の箇所では、福音派について書かれていました。

福音派は私の所属している教派です。

福音派の特徴は以下の通り。

１．聖書の権威と充分性。

２．十字架上のキリストの死による贖いの独自性。

３．個人的回心の必要性。

４．福音伝道の必要性・正当性・緊急性。

もともと、福音派は、プロテスタント全体を指す言葉だったようですが、

今日、狭義の意味の福音派は、上に挙げたような特徴を持つ集団のことを指すようになりました。

まあ、簡単に言うと、聖書に忠実な教派といいますか。

対立する教派としてリベラル派があります。

●ペンテコステ派とカリスマ派

2006-07-27 17:05:49 | キリスト教神学入門

＜今日読んだ箇所＞

「キリスト教神学入門、A・E・マクグラス著」：１７６～１７７頁

＜ペンテコステ運動とカリスマ運動＞

今日の箇所では、ペンテコステ運動とカリスマ運動についての記述がありました。

この両者の違いは良く分かりませんでした。

今でもペンテコステ派とカリスマ派という教派があります。

この２つの教派は、聖霊の働きに重点を置いているようです。

うちの教会では、異言などは一切語られないのですが、ペンテコステ派の教会では異言を語ったりします。

●インド・アフリカ

2006-07-30 18:13:43 | キリスト教神学入門

＜今日読んだ箇所＞

「キリスト教神学入門、A・E・マクグラス著」：１７８～１９２頁

＜インド・アフリカ＞

○インド

インドには現在、以下のようなキリスト教の取り上げ方があります。

１．宇宙的キリストは宗教経験の様々な多様性を全て含む。

２．キリストは、ヒンズー教の宗教的探求の究極目標である。

３．ヒンズー教はキリスト教に対して、旧約聖書がキリスト教に対して持つのと同様の関係にある。

つまり、ユダヤ教に似た役割を果たすのである。

４．キリスト教はヒンズー教とは絶対に相容れず、非連続である。

５．ヒンズー教の状況が、特にインド的な形態のキリスト教を生む。

○アフリカ

サハラ以南のアフリカにキリスト教がもたらされたのは、主としてイギリスからの宣教師によってであった。

そこでは、初めからキリスト教と西洋の商業的および政治的な利害が強く結びついていました。

１９６０年代以降、アフリカでも独自の神学の発展がありました。

●神学と方法

2006-11-16 14:35:46 | キリスト教神学入門

＜１１月１日～１１月１５日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学入門、A・E・マクグラス著」：１９３～３６０頁

＜資料と方法＞

８月に入り、「キリスト教神学入門」を読むのは頓挫しておりましたが、１１月になり再開しました。

１１月１日～１１月１５日に読んだ箇所は、＜資料と方法＞と言う題の部分です。

この箇所は、後に続く＜キリスト教神学＞の序説の役目をしています。

この箇所では、異端と正統、哲学と神学、啓示、などについて書かれています。

●神論

2006-12-10 19:25:42

＜１１月１６日～１２月１０日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学入門、A・E・マクグラス著」：３６１～４３６頁

＜神論＞

今回読んだ箇所は、「神論」と呼ばれるところです。

今回からいよいよ神学の中心的な論理が展開されています。

・神は男性か？

・人格神とは？

・神は苦しむか？

・神の死？

・神の全能性

・神義論

・創造者なる神

・聖霊

以上の項目について書かれていました。

一つとりあげてみたいと思います。

キリスト教の特色として人格神と言うのがあります。

他の宗教、例えば仏教やニューエイジのようなものだと、仏やサムシンググレートには、人格のようなものは、あまり感じられないのではないでしょうか？

ただ、ボーっと存在している、集合的無意識のような感じのものが仏やサムシンググレートと呼ばれているような気がします。

それに対してキリスト教の神は、あきらかに感情を持っており、愛する神、怒る神、人間の歴史や人間の個人的な人生に介入してくる神です。

キリスト教の神は非常にダイナミックな神です。

●三位一体論

2007-01-12 14:15:10

＜１２月１１日～１月１２日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学入門、A・E・マクグラス著」：４３７～４７１頁

＜三位一体論＞

今回の箇所では、三位一体について書かれていました。

この三位一体という教理は分かりにくいと言えば分かりにくいです。

父なる神、子なる神（イエス・キリスト）、聖霊、この３つが一体であると言うことを表しているのですが、理解しづらいかもしれません。

３つの位格に別れているけど、この３つは、一つなのです。

これは人知を超えている教理だと思います。

もし、ある宗教の教理が人知に治まるのであれば、それは人間が勝手に作った宗教に過ぎないかもしれません。

わざわざ人知を超えた教理を人間は作らないと思います。

本当の宗教と言うものには人知を超えた部分があってもおかしく無いと思います。

●キリスト論

2007-02-09 19:07:34

＜１月１３日～２月８日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学入門、A・E・マクグラス著」：４７２～５２０頁

＜キリスト論＞

今回の読んだ箇所は、キリスト論と呼ばれる箇所でした。

この本では、キリストの人格の教理と記されています。

キリストをどのように見るか。

大きく分けると２つの行き方があるように思えます。

キリストには、神性と人性と言う２つの性質があります。

イエス・キリストの神性の部分だけ見る見方、これは古くはグノーシスと呼ばれる異端に繋がる見方だと思います。

代わりに、キリストの人性の部分だけ強調する見方。

これも不十分に思えます。

キリストは、神であり人でもあると、神性と人性を両方認めるのが伝統的なキリストの見方のようです。

●信仰と歴史

2007-02-18 01:27:32

＜２月９日～２月１８日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学入門、A・E・マクグラス著」：５２１～５５４頁

＜信仰と歴史＞

今回読んだところには、信仰と歴史に関する諸問題について書かれていました。

啓蒙主義が盛んなころ、イエス・キリストが復活したと言う超自然的な奇跡は起こらなかったのでは、と言う考えが起こりました。

キリストの復活と言うのは、神話的なもので、実際の歴史は異なるという考え方が起こりました。

そのころ、そのような史的イエスを探求する動きも現れました。

ところが、啓蒙主義が終わると、このような動きは、収束して行ったようです。

人間の理性の限界。

歴史の普遍性の限界。

これらの限界があることが分かってきたので、そのような動きは収束したと思われます。

今では、より古典的な解釈、つまりイエス・キリストは復活した、と言う考え方が一般的になったようです。

●救いの教理

2007-02-21 01:50:25

＜２月１９日～２月２１日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学入門、A・E・マクグラス著」：５５５～５９９頁

＜キリストにおける救いの教理＞

イエス・キリストはどのようにして人を救ったか？

イエス・キリストがご自身を生贄として捧げることにより、人類の罪を背負って亡くなりました。

誰が救われるのか？

全ての人が救われると主張する者もいます。

一部の人だけが救われるとする者もいます。

●人間の本性と罪と恩恵の教理

2007-02-23 04:35:54

＜２月２２日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学入門、A・E・マクグラス著」：６００～６４８頁

＜人間の本性と罪と恩恵の教理＞

今日読んだ箇所は、人間の本性と罪と恩恵の教理と題されています。

人間は、生まれながらに罪人である。

これは聖書が示していることだと思います。

その人間を神は恩恵により義としてくださいます。

義と言うのは、神様のお目にかなった状態になることです。

ここで、２種類の見方が発生します。

人間は、自分の行いによって義とされるのか、それとも神の一方的な恩恵により義とされるのか。

伝統的キリスト教の解釈によれば、神の一方的な恩恵により義とされるとなるようです。

今日の箇所には、予定と言う教理も説明されていました。

予定とは、他の本によると聖定の一部分のことだろうと思います。

聖定とは、神は、人間に起こることを全て決めていらっしゃること。

でも、人間には自由もあります。

これは、一見矛盾するように思えます。

この教理も謎を残しているように思えます。

●教会論

2007-03-05 16:16:30

＜２月２３日～３月５日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学入門、A・E・マクグラス著」：６４９～６８９頁

＜教会論＞

今回の箇所では、教会に関する教理について書かれていました。

教会は、２つに分けられるようです。

地域教会と公同の教会。

地域教会とは、実際目にみえる形で存在している教会のことを指します。

公同の教会とは、はるか昔から今に至るまで脈々と続いている一つの教会を指します。

実際の教会は、様々な教派に分かれていますが、それでも、公同の教会に所属していると考えます。

●サクラメント論

2007-03-13 19:48:55

＜３月６日～３月１３日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学入門、A・E・マクグラス著」：６９０～７２４頁

＜サクラメント論＞

サクラメントと言うのは、教会の儀式のことです。

カトリックでは、７つのサクラメントがあります。

プロテスタントでは、２つのサクラメントがあります。

プロテスタントの２つのサクラメントは、聖餐式と洗礼です。

聖餐に関しては、様々な意見があるようです。

聖餐の時口にするパンとぶどう酒は、それぞれイエス・キリストの肉と血を意味するのですが、その見方により意見が分かれています。

●キリスト教と世界諸宗教

2007-03-16 20:49:18

＜３月１４日～３月１６日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学入門、A・E・マクグラス著」：７２５～７５０頁

＜キリスト教と世界諸宗教＞

今日の箇所では、キリスト教徒が世界諸宗教をどう見るのか書かれていました。

世界諸宗教の見方として、３つ挙げられていました。

特殊主義

包括主義

多元主義

以上の３つです。

特殊主義というのは、キリスト教は特殊であると言う主義です。

包括主義というのは、他の宗教も救いに通じるという考え方です。

多元主義も、包括主義に似ていて、他の宗教も神に対する信仰はキリスト教と一緒だということです。

ただ。聖書にはこう書かれています。

14:6 イエスは彼に言われた。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。

ヨハネの福音書１４章６節

●最後の事物

2007-03-20 00:15:11

＜３月１７日～３月１９日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学入門、A・E・マクグラス著」：７５１～７８３頁

＜最後の事物＞

今回読んだところは、この本の最終章です。

今回読んだところには、この世界の終わりや天国、地獄について語られていました。

聖書によると人は皆、永遠の命を持っているそうです。

つまり、死というのは、通過点にしかすぎないわけです。

死んだ後、天国もしくは地獄に行くことになります。

天国か地獄のどちらかで、永遠に過ごすことになるようです。

＜読み終わった感想＞

今日で、「キリスト教神学入門」読み終わりました。

途中読むことが頓挫していたこともありますが、なんとか読みきりました。

読み始めたのは、去年の４月だったので、読破するまで約１年かかったことになります。

でも、なんとか読み終えることができて良かったです。

次回からは、ミラード・J・エリクソン氏の「キリスト教神学第１巻」を読みはじめたいとおもいます。

**04.キリスト教神学第１巻**

●スタート、神学とは何か

2007-03-25 06:53:17 | キリスト教神学第１巻

＜３月２０日～３月２４日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学第１巻、ミラード・J・エリクソン著」：１～３４頁

＜はじめに＞

さて、今回からいよいよミラード・J・エリクソン先生の本に入って行きます。

この本を読む準備として、１年かけて、神学の入門書を読みました。

はたしてその成果はあるのだろうか。

とりあえず、３４ページまで読みました。

感じとしては、行けます。

カール・バルトやアウグスティヌスや、トマス・アクィナスとか出てきますが、

分かります。

入門書を読んだだけのことはあります。

やったー！！

＜神学とは何か＞

今回のところには、神学とは何かと言う題で文章が書かれていました。

神学とは、学問の女王である、などと言われていたこともあるそうです。

現在では、科学的である、客観的であるということが学問の定義として

用いられるようになってきました。

そうなると、神学と言うのは学問では無いとなってしまいます。

●神学と哲学

2007-03-30 03:33:50 | キリスト教神学第１巻

＜３月２５日～３月２９日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学第１巻、ミラード・J・エリクソン著」：３５～６１頁

＜神学と哲学＞

今回の箇所では、神学と哲学の関係について述べられました。

神について研究する時に哲学を利用すると、記述する意味がはっきりするようです。

神を研究する時に利用する２０世紀の哲学について述べられていました。

１．プラグマティズム

２．実存主義

３．分析哲学

４．プロセス哲学

５．脱構築

以上の５つの哲学を神学で利用するようです。

●神学の方法

2007-04-03 08:08:39 | キリスト教神学第１巻

＜３月３０日～４月２日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学第１巻、ミラード・J・エリクソン著」：６２～８７頁

＜神学の方法＞

今日の箇所には、神学の方法について書かれていました。

神学を行うには以下の段階があるようです。

１．聖書資料の収集

２．聖書資料の統合

３．聖書の教えの意味の分析

４．歴史における取り扱いの検討調査

５．他文化のもつ視点の検討

６．教理の本質の見きわめ

７．聖書外の資料からの光

８．教理の今日的な表現

９．解釈における中心的モチーフの展開

１０．主題の層別化

以上の１０の段階があるそうです。

●神学と聖書の批評的研究

2007-04-25 05:05:06 | キリスト教神学第１巻

＜４月３日～４月２５日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学第１巻、ミラード・J・エリクソン著」：８８～１２１頁

＜神学と聖書の批評的研究＞

神学を構築するにあたり、聖書の批評的研究が行われた。

批評的研究には、以下の４つがあります。

・様式史批評

・編集史批評

・構造批評

・読み手応答批評

この中で、「読み手応答批評」について書いてみたいと思います。

この「読み手応答批評」と言うのは、意味の所在は、本文にあるのではなく読者にあるとします。

読者は、本文に意味を見出すというより、むしろ、その意味を創造します。

したがって、焦点は、本文にではなく、読者に集められます。

●キリスト教メッセージの今日化

2007-05-10 14:58:10 | キリスト教神学第１巻

＜４月２６日～５月１０日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学第１巻、ミラード・J・エリクソン著」：１２２～１４５頁

＜キリスト教メッセージの今日化＞

今回の箇所には、キリスト教メッセージの今日化ということについて書かれていました。

イエス・キリストが生きていた時代から、もう２０００年ぐらい時間が経過しています。

なので、当時は当たり前だったことが、当たり前では無くなってきています。

そこで、キリスト教メッセージの今日化と呼ばれることをします。

神学を今日化するには、２つのアプローチがあります。

一つは、「改変者」と呼ばれるアプローチ。

もう一つは、「翻訳者」と呼ばれるアプローチ。

翻訳者と呼ばれるアプローチは、翻訳をするように古代の神学の内容を変えずに、できるだけ元の意味を残そうとするものです。

改変者とは、翻訳者より一歩進んで、時代に合わせ重大な内容の変更を伴う改変をしようとするものです。

●神学とその言語

2007-05-14 13:17:06 | キリスト教神学第１巻

＜５月１１日～５月１４日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学第１巻、ミラード・J・エリクソン著」：１４６～１７３頁

＜神学とその言語＞

こにゃにゃちわ。みなさん。

今回、読んだ箇所には、「神学とその言語」について書かれていました。

なんだか、ちょっと難しそうなタイトルです。

ちょっと部分的に引用してみますね。

--------

「宗教的言語はしばしば感覚的経験を超えるために、その現実が疑問視される。

「経験的検証」（empirical verification）を求める現代人の知性にとって、この種

の言語は納得の行かないものと見られる。宗教的言語が直接的検証にかけられ

ないのは確かである。だが、宗教的言語は、幅広い総合的体系によって認識上

意味あるものとなりうる。そして、それは、科学的仮説のように理解とコミット

メントを呼び起こす一定の機能を果たすのである。」

--------

なんだか、「ふにゃ？」と言う感じです。

まずい、だんだん難しくなってきた（笑）

●ポストモダンと神学

2007-05-21 20:59:17 | キリスト教神学第１巻

＜５月１５日～５月２１日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学第１巻、ミラード・J・エリクソン著」：１７４～１９４頁

＜ポストモダンと神学＞

ポストモダンを語るには、まずモダニズムを考えなくてはなりませんね。

モダニズムの生みの親はデカルトであると言うのが一般的です。

デカルトは、「我思うゆえに我あり。」と言う言葉を残しています。

ラテン語だと「コギト エルゴ スム」となります。

有名な言葉なので、聞いたことがある人が多いと思います。

モダニズムの特色は、なんといっても合理的であると言うことでしょう。

人間の理性を尊重し、合理的に活動するのがモダニズムと言えます。

ところが、近年、モダニズムの時代が終わって、ポストモダンの時代になったとの認識が広がっているようです。

合理性を追求していっても、それがもたらしたものは、第二次世界大戦の大量殺戮など、不毛な血の通わない歴史でありました。

その反動が今の時代に来ています。

●神の普遍的啓示（一般啓示）

2007-05-27 23:27:23 | キリスト教神学第１巻

＜５月２２日～５月２７日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学第１巻、ミラード・J・エリクソン著」：１９５～２２３頁

＜神の普遍的啓示（一般啓示）＞

今日の箇所では、神の啓示について書かれていました。

啓示は、２種類に分かれます。

一般啓示と特別啓示の２つです。

一般啓示とは、例えば自然界に表れるすばらしさ、精巧さ、などから得られる啓示です。

たとえば、人間の目を考えてみると、それは非常に精巧にできていることが分かります。

この精巧さは偶然では無く、神の作品であると見る人もいると思います。

このように神の業を自然から読み取るとそれは、一般啓示になります。

もう一つの啓示は、特別啓示です。

これは、聖書を通して与えられる啓示です。

●神の特別啓示

2007-06-04 14:48:31 | キリスト教神学第１巻

＜５月２８日～６月４日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学第１巻、ミラード・J・エリクソン著」：２２４～２５２頁

＜神の特別啓示＞

神の特別啓示とは、神が我々個人に特別に表れたことを指し示します。

現代の我々にとっては、聖書が特別啓示になります。

聖書を通して神の臨在に触れることができます。

●啓示の保存：霊感

2007-06-12 15:05:57 | キリスト教神学第１巻

＜６月５日～６月１２日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学第１巻、ミラード・J・エリクソン著」：２５３～２７９頁

＜啓示の保存：霊感＞

今日の箇所では、イエス・キリストの啓示がどのように保存されたのか、書かれていました。

また、聖書の霊感とはどんなものなのか、などについて書かれていました。

霊感とは、通常聖書を書いた人が受けるものだが、現代ではその書かれた文書そのものに霊感があるとされています。

その霊感とはどのようなものでしょうか。

霊感は、聖書箇所によって違いがあるのでしょうか。

霊感が強い箇所と弱い箇所と言うような感じの区分けがあるのでしょうか。

というようなことが今回の箇所に書かれていました。

●無誤性

2007-06-17 15:55:19 | キリスト教神学第１巻

＜６月１３日～６月１７日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学第１巻、ミラード・J・エリクソン著」：２８０～３０３頁

＜無誤性＞

聖書に書かれていることがらは間違いが無いのでしょうか。

聖書には、一部矛盾するような箇所が見受けられるが、その解釈はどのようにしたら良いのでしょうか。

聖書は、科学や数学の本ではなく、そのような正確さを求めることはできません。

●権威

2007-06-27 21:00:56 | キリスト教神学第１巻

＜６月１８日～６月２７日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学第１巻、ミラード・J・エリクソン著」：３０４～３２６頁

＜権威＞

今回の箇所は権威について書かれていました。

神は我々人間に対し、信仰と従順を要求する権威を持っています。

まあ～、当たり前と言ったら当たり前のことかもしれません。

ただ、これはクリスチャンにとっては当たり前でも、他の人々にとっては当たり前じゃないのでしょう。

さて、今日で、キリスト教神学第１巻を読み終わりました。

次回から、キリスト教神学第２巻を読み始めます。

キリスト教神学は、第４巻まで出ています。

ぼちぼち読み進めようと思います。

**05.キリスト教神学第２巻**

●神の偉大さ

2007-07-23 22:41:10 | キリスト教神学第２巻

＜６月２８日～７月２３日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学第２巻、ミラード・J・エリクソン著」：１～３０頁

＜神の偉大さ＞

神は霊である。

神は人格的存在である。

神はいのちである。

神は無限である。

神は不変である。

神は、ただ、ボーとこの世界を眺めているのでは無く、人それぞれに関わってきます。

人格的存在です。

●神の慈しみ深い善性

2007-08-13 23:25:11 | キリスト教神学第２巻

＜７月２４日～８月１３日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学第２巻、ミラード・J・エリクソン著」：３１～５４頁

＜神の慈しみ深い善性＞

みなさん、神様と言うとどのようにイメージされるでしょうか？

物事を決め自身の計画に従って行動するスーパーコンピューターのような存在をイメージされるでしょうか。

それとも、厳格な神様を想像するでしょうか。

聖書で示されている神様と言うのは、慈しみ深い神様なのです。

神様はもちろん厳しい側面もありますが、愛に富んでおり、慈しみ深いのです。

●神の近さと隔たり：内在性と超越性

2007-08-17 22:54:14 | キリスト教神学第２巻

＜７月２４日～８月１３日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学第２巻、ミラード・J・エリクソン著」：５５～７６頁

＜神の近さと隔たり：内在性と超越性＞

聖書は、神が内在性と超越性の両方を持っていることを示しています。

内在性とは、自然や人間や歴史のうちに見られる神の存在と活動である。

この内在性を強調すると汎神論になってしまう。

神は、内在性を持ちながら超越性も持っています。

バランス良く解釈することが重要だと思いました。

●三位一体

2007-08-28 23:52:51 | キリスト教神学第２巻

＜８月１４日～８月２８日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学第２巻、ミラード・J・エリクソン著」：７７～１０４頁

＜三位一体＞

今日の箇所には、三位一体について語られていました。

三位一体と言うと、「三位一体の改革」などと、一般用語として語られることもあります。

三位一体は、神は３つの位格を持っていて、それが一つであると言うことを表しています。

じゃあ、その位格とはなんぞや、と言う疑問が湧くと思います。

３つの位格は、父なる神、イエス・キリスト、聖霊の３つです。

●神の計画

2007-09-07 21:53:36 | キリスト教神学第２巻

＜８月２９日～９月７日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学第２巻、ミラード・J・エリクソン著」：１０５～１３０頁

＜神の計画＞

今日の箇所では、神の計画について書かれていました。

神の計画とは、神は人間の行動や歴史を支配しており、神の計画の通りに物事が進んで行くということを表しています。

ここで、疑問になるのが、人の自由についてだろうと思います。

神の計画と人の自由とは両立する概念なのでしょうか。

人は、自由に物事を考え行動しているつもりになっているが、実は、その考え自体が神に支配されています。

そうだとしたら、人の自由とはなんなのでしょうか。

神の計画と人の自由とは、今、生きている我々にとって、理解の難しいことだと思います。

●創造

2007-09-15 22:24:49 | キリスト教神学第２巻

＜９月８日～９月１５日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学第２巻、ミラード・J・エリクソン著」：１３１～１５５頁

＜創造＞

今日の箇所には、神がこの世界を作った（創造した）点について書かれていました。

私は、この世界は、無から創造されたと思っていましたが、この本の著者（エリクソン氏）も無からの創造を述べていました。

著者は、進化論については、種を超える進化は無かったのでは、との推論をしています。

種の中の小進化については、認めているようです。

創造されてからの日数については、ヘブル語のヨームと言う言葉を日では無く期間とみなし、創造の６日間をもっと実際は長かったのでは、との推論も載っていました。

●摂理

2007-09-23 22:10:06 | キリスト教神学第２巻

＜９月１６日～９月２３日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学第２巻、ミラード・J・エリクソン著」：１５６～１８５頁

＜摂理＞

今回の箇所は摂理について書かれていました。

前回の「創造」は神が最初に行ったことであるのに対して、「摂理」は、創造された世界を維持したり、人間の行動に関わってきたりする神の働きのことです。

人間の目には、物事が上手く行ったり行かなかったりしますが、そういうのも摂理なのです。

●悪と神の世界

2007-09-30 20:31:55 | キリスト教神学第２巻

＜９月２４日～９月３０日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学第２巻、ミラード・J・エリクソン著」：１８６～２１２頁

＜悪と神の世界＞

今回の箇所はなぜこの世に悪があるのでしょうか。

神は善なるお方なのに、なぜ悪を放置されているのでしょうか。

こういった問題について書かれていました。

この問題のいくつかの解決方が示されていますが、

どれも一長一短なような気がします。

人の魂と言うのは、永遠に存在すると言う仮定に基づけば、悪というのも、別の捕らえ方ができるのではないかと思います。

例え、その人生が不幸であっても、悪に遭遇し死んだとしても、それで終わりでは無ければ、不公平ではなくなるのではないか、と思います。

●天使

2007-10-05 23:32:08 | キリスト教神学第２巻

＜１０月１日～１０月５日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学第２巻、ミラード・J・エリクソン著」：２１３～２３６頁

＜天使＞

今回の箇所には天使について語られていました。

天使は、神様に仕えるものとして創造されたようです。

その後、天使の一部は堕落しました。

それはサタンや悪霊と呼ばれるものになったようです。

天使に関しては、聖書に出てくるのですが、天使自体についてはあまり書かれていないため、不明な点が多いそうです。

ただ、天使の数は非常に多いようです。

人には、その人を守護する守護天使がいるとする考え方もあるようです。

--------

今日で、キリスト教神学第２巻は読了しました。

次は、キリスト教神学第３巻を読みたいと思います。

**06.キリスト教神学第３巻**

●人間論への序論

2007-10-10 22:19:45 | キリスト教神学第３巻

＜１０月６日～１０月１０日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学第３巻、ミラード・J・エリクソン著」：１～２５頁

＜人間論への序論＞

今日の箇所には、人間について論じるための序論が書かれていました。

現代の人間に対する見方をいくつかのカテゴリーに分け説明されていました。

--------

「人とは、何者なのでしょう。

あなたがこれを心に留められるとは。

人の子とは、何者なのでしょう。

あなたがこれを顧みられるとは。

あなたは、人を、神よりいくらか劣るものとし、

これに栄光と誉れの冠をかぶらせました。

あなたの御手のわざの多くを人に治めさせ、

万物を彼の足の下に置かれました。」

（旧約聖書 詩篇８篇４～６節）

●人間の起源

2007-10-17 20:31:10 | キリスト教神学第３巻

＜１０月１１日～１０月１７日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学第３巻、ミラード・J・エリクソン著」：２６～５０頁

＜人間の起源＞

今回の箇所には、人間の起源について書かれていました。

有神論的進化論や漸進的創造論などが紹介されていました。

今回、読んだ箇所になかなか良さそうな聖書の言葉が載っていましたので、引用したいと思います。

--------

「知れ。主こそ神。

主が、私たちを造られた。

私たちは主のもの、主の民、その牧場の羊である。

感謝しつつ、主の門に、賛美しつつ、その大庭に、はいれ。

主に感謝し、御名をほめたたえよ。

主はいつくしみ深くその恵みはとこしえまで、その真実は代々に至る。」

（新改訳聖書：詩篇１００篇３～５節）

●人間の中にある神のかたち

2007-10-28 15:14:28 | キリスト教神学第３巻

＜１０月１８日～１０月２８日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学第３巻、ミラード・J・エリクソン著」：５１～７３頁

＜人間の中にある神のかたち＞

聖書によると人間は、神のかたちに似せて作られたとあります。

いったいこれはどうゆうことなのでしょうか。

神に肉体があり、人間のような姿をしているのでしょうか。

これに関しては、聖書の中にあまり記述が無くさまざまな解釈があるようです。

一つ言えることは、神に肉体があり、人間のような姿をしていると考えるのは間違いであるようです。

人間のかたちについて、実体的、関係的、機能的見解の３つの見解があるようです。

●人間の構成の性質

2007-11-03 21:21:53 | キリスト教神学第３巻

＜１０月２９日～１１月３日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学第３巻、ミラード・J・エリクソン著」：７４～９８頁

＜人間の構成の性質＞

今回の箇所は、人間を構成している性質について書かれていました。

キリスト教では、人間を唯物論的に体しか無い存在とは考えないようです。

体と魂が合わさったものと考えるようです。

その他、体と魂と霊と３分割して考える人もいます。

●人類の普遍性

2007-11-07 19:25:33 | キリスト教神学第３巻

＜１１月４日～１１月７日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学第３巻、ミラード・J・エリクソン著」：９９～１２０頁

＜人類の普遍性＞

今回の箇所には、人類の普遍性について書かれていました。

人種差別について。

アメリカでは、白人至上主義みたいなものがあります。

黒人に対する差別。

このような差別は聖書の一部を勝手に解釈して行われているようです。

その差別に対する反論が載っておりました。

その他、富のあるなしの差別。

男女の差別。

胎児を人とみなすかどうか。

そのような問題について書かれていました。

この本の著者は、保守的な福音派の方なので、中絶には反対の意見が載っておりました。

●罪の本質

2007-11-13 20:16:50 | キリスト教神学第３巻

＜１１月８日～１１月１３日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学第３巻、ミラード・J・エリクソン著」：１２１～１４６頁

＜罪の本質＞

キリスト教で言う罪とはなんなのでしょうね。

もちろん不倫とか罪なのでしょうけど。

罪の本質とはなんなのでしょうか。

この本によると「神の排除」が罪の本質のようです。

神の排除とは、神以外のものを神とすることだそうです。

たとえば、お金とか自分の考えとかを神とする、そういうことが罪になるのでしょう。

●罪の根源

2007-11-18 23:51:46 | キリスト教神学第３巻

＜１１月１４日～１１月１８日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学第３巻、ミラード・J・エリクソン著」：１４７～１６８頁

＜罪の根源＞

罪の根源とはなんでしょう。

今まで、さまざまな議論がされてきたようです。

例えば、罪の根源とは人間が動物だった時の衝動が残っていると言う説を唱える人がいたりしました。

これは、進化論に基づいています。

例えば、食欲や性欲。

この２つも行き過ぎると害を及ぼす可能性があります。

食欲は、暴飲暴食になったり、性欲は、強姦などの犯罪になったりすることもあるでしょう。

そうならないために、理性によってコントロールするのが人間なのでしょう。

ただ、罪の根源が動物だった時のなごりであると言うのは、キリスト教的では無いようです。

本から引用致します。

--------

福音主義の見地から言うと、問題は、人間が本質において罪深く、彼らを罪へと誘おうとする強い力のある世界に住んでいることにある。

罪の治療法は、超自然的に人間の本性の変革が生み出されることを通して、また誘惑の力に立ち向かう神による助けによってもたらされる。

人を変革し、神との関係に入らせるものは個人の回心と新生であり、この神との関係が、成功したキリスト者生活を可能にするのである。

●罪の結果

2007-11-25 16:22:15 | キリスト教神学第３巻

＜１１月１９日～１１月２５日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学第３巻、ミラード・J・エリクソン著」：１６９～１９１頁

＜罪の結果＞

○罪の結果人間はどうなってしまうのでしょう。

１．神に嫌われる

２．罪責

３．刑罰

４．死

　　肉体の死

　　霊的な死

　　永遠の死

○罪人への影響

１．奴隷状態

２．現実逃避

３．罪の否定

４．自己欺満

５．無感覚

６．自己中心

７．不安

○他者との関係への影響

１．競争、張り合うこと

２．感情移入の能力の欠如

３．権威の否定

４．愛する能力の欠如

●罪の重大さ

2007-11-29 18:50:21 | キリスト教神学第３巻

＜１１月２６日～１１月２９日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学第３巻、ミラード・J・エリクソン著」：１９２～２１６頁

＜罪の重大さ＞

今回の箇所のタイトルは罪の重大さとなっていますが、いまいち、タイトルと本文が合っていないような気がしました。

今回の箇所には原罪についての解説などが載っていました。

ペラギウス主義、アルミニウス主義、カルヴァン主義などが解説されていました。

●罪の社会的側面

2007-12-04 22:51:19 | キリスト教神学第３巻

＜１１月３０日～１２月４日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学第３巻、ミラード・J・エリクソン著」：２１７～２３８頁

＜罪の社会的側面＞

今回の箇所には、罪の社会的側面について書かれていました。

キリスト教で”この世”と言うと、神に対して反抗する勢力を表すようです。

この世は罪に満ちています。

この世は、サタンが支配しています。

この世を変革するには、非暴力的な改革と個人の新生が必要とのこと。

●キリスト論の方法における今日的問題

2007-12-12 20:15:07 | キリスト教神学第３巻

＜１２月５日～１２月１２日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学第３巻、ミラード・J・エリクソン著」：２３９～２６４頁

＜キリスト論の方法における今日的問題＞

今日の箇所には、キリスト論を考える上での方法について書かれていました。

「上からのキリスト論」と「下からのキリスト論」について説明がなされました。

「上からのキリスト論」とは、史的イエスではなく、ケリュグマ、キリストに関する教会の宣教的告知です。

また、キリストへの信仰は、合理的な証拠に基づいておらず、合理的な証拠によって正当化されるものでもない。科学的に証明できないのです。

「下からのキリスト論」とは、イエスへの信仰を支持する合理的根拠をあげることができるとするものです。

●キリストの神性

2007-12-22 22:43:08 | キリスト教神学第３巻

＜１２月１３日～１２月２２日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学第３巻、ミラード・J・エリクソン著」：２６５～２９１頁

＜キリストの神性＞

今日の箇所では、キリストの神性について書かれていました。

キリストは単なる人ではなく神であるとする考えがキリストの神性だと思います。

これに対して、歴史上反論が幾つか起こっています。

現在まで残っている反論するグループとしては、エホバの証人をあげることができます。

このエホバの証人は、キリストを神とはしません。

●キリストの人性

2008-01-02 18:41:46 | キリスト教神学第３巻

＜１２月２３日～１月２日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学第３巻、ミラード・J・エリクソン著」：２９２～３１３頁

＜キリストの人性＞

キリストは、神であり人でもありました。

これが、キリスト教の伝統的な理解でした。

ところが、歴史の中でこれに反対する勢力が生まれました。

ドケティズム（仮現論）とアポリナリオス主義です。

これらは、キリストの人性を否定しています。

●キリストの人格の統一性

2008-01-15 18:50:05 | キリスト教神学第３巻

＜１月２日～１月１５日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学第３巻、ミラード・J・エリクソン著」：３１４～３３３頁

＜キリストの人格の統一性＞

キリストの人格を考える時、いくつかの異端が生まれました。

それは、基本的に以下の６つがあります。

１．イエスの神性の真正性を否定するエビオン主義

２．イエスの神性の完全性を否定するアリウス主義

３．イエスの人性の真正性を否定するドケティズム

４．イエスの人性の完全性を否定するアポリナリオス主義

５．イエスの人格を分割するネストリオス主義

６．イエスの人格の本性を混同するエウテュケス主義

●処女降誕

2008-02-03 23:27:32 | キリスト教神学第３巻

＜１月１６日～２月３日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学第３巻、ミラード・J・エリクソン著」：３３４～３５６頁

＜処女降誕＞

今日の箇所には、イエス・キリストが処女によって生まれたことについて書かれていました。

処女降誕に関しては、その奇跡を信じるか信じないかによって人が分けられると思います。

処女から生まれたので、罪の性質が無いと言う人々もいるようですが、これは、特に根拠の無いことのようです。

●キリストのみわざへの序論

2008-02-13 21:14:50 | キリスト教神学第３巻

＜2008年2月4日～2008年2月13日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学第３巻、ミラード・J・エリクソン著」：357～381頁

＜キリストのみわざへの序論＞

キリストのみわざに関して、今回読んだ箇所には、ハデス降下が語られていました。

ハデス降下以外にも色々書かれていましたが、私は、ハデス降下に注目しました。

ハデス降下と言うのは、イエス・キリストが十字架で死んだ後、よみがえられるまでの間にハデスに降りたと言うのです。

そういえば、使徒信条にも「よみにくだり」と言う文言があります。

ある人は、人が死んだ後、セカンドチャンスとして救われることもあるとしています。

人が死んだ後にハデスに降りたイエス・キリストに出会い救われることもあるとのこと。

果たしてこれはどうゆうことなのでしょうね？

●贖罪の諸説

2008-02-26 21:08:07 | キリスト教神学第３巻

＜2008年2月14日～2008年2月26日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学第３巻、ミラード・J・エリクソン著」：382～405頁

＜贖罪の諸説＞

今回の箇所は、イエス・キリストによる贖罪について書かれていました。

イエス・キリストが我々の罪の代価としてその命を捧げたことに関して、色々な論点から書かれていました。

たとえば、罪の代価を誰に払ったのか。

サタンに払ったとか。

●贖罪の中心テーマ

2008-03-01 20:17:50 | キリスト教神学第３巻

＜2008年2月27日～2008年3月1日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学第３巻、ミラード・J・エリクソン著」：406～433頁

＜贖罪の中心テーマ＞

代償的贖罪と言うのが、贖罪の中心的なテーマのようです。

代償的贖罪と言うのは、イエス・キリストが人類の罪による刑罰を一身に背負い、その刑罰を受けたことを指します。

イエス・キリストの尊い死により我々クリスチャンの罪は許されたのです。

●贖罪の範囲

2008-03-04 22:49:46 | キリスト教神学第３巻

＜2008年3月2日～2008年3月4日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学第３巻、ミラード・J・エリクソン著」：434～455頁

＜贖罪の範囲＞

この章では、贖罪の範囲について書かれていました。

贖罪の範囲には、２種類の解釈があるようです。

一つは、贖罪は、クリスチャンにのみ当てはめられるとするもの。

もう一つは、贖罪は、全人類に当てはめられるとするもの。

この２種類の贖罪について書かれていました。

この２種類の贖罪については、それぞれ聖書の記述から推測できるのですが、どちらが正しいとは一概に言えないようです。

**07.キリスト教神学第４巻**

●聖霊の人格

2008-03-05 20:11:38 | キリスト教神学第４巻

＜2008年3月5日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学第４巻、ミラード・J・エリクソン著」：1～27頁

＜聖霊の人格＞

さて、今日から、キリスト教神学の第４巻に突入です。

いや～、ここまで来るの、長かったです。

なんか、旅行をしている気分になりました。

神学の荒野を旅するふかごろうです。

で、今日の箇所の解説ですね。

今日の箇所では、聖霊に人格があることなどが述べられていました。

聖霊と言うのは、神のパワーのようなそういう非人格的な存在ではなく、悲しんだり喜んだりする人格を持っているとのことです。

そして、三位一体の一つの位格であります。

三位一体とは、父（父なる神）、子（イエス・キリスト）、聖霊のことを表しています。

あと、聖霊を論じる時に、ペンテコステ派やカリスマ派の話も出てきました。

1900年代に、聖霊によるリバイバルが起こったようです。

この聖霊によるリバイバルによって、起こったのがペンテコステ派やカリスマ派、もしくは、聖霊派と呼ばれる教派です。

●聖霊のみわざ

2008-03-15 19:21:58 | キリスト教神学第４巻

＜2008年3月6日～2008年3月14日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学第４巻、ミラード・J・エリクソン著」：28～50頁

＜聖霊のみわざ＞

聖霊のみわざと聞いて僕が第一に思い浮かべるのは、異言です。

ペンテコステ派などは、聖霊のみわざとして異言を重視するようですね。

僕は、異言は話せませんし、僕の通っている教会の教派はペンテコステ派じゃないので、あんまり関係の無いことだと思っています。

異言の他に聖霊のみわざとして、預言とか、奉仕とかあるみたいですね。

僕は預言も出来ません。

ちなみに、ここで言う預言とは、未来を予知する予言とは少し異なると言うことに触れておきましょう。

預言と予言。

預言と言うのは、神様の言葉を預かると言う意味です。

なので、未来を予知することも含めて、神様の言葉を広く取り次ぐことを指します。

予言の方は、単に未来を予知することですね。

●救いの諸概念

2008-03-20 22:26:40 | キリスト教神学第４巻

＜2008年3月15日～2008年3月20日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学第４巻、ミラード・J・エリクソン著」：51～73頁

＜救いの諸概念＞

救いに関しての様々な概念が語られていました。

例えば救いの範疇について。

救いは全ての人に及ぶのか、それとも、クリスチャンのみに及ぶのか。

●救いに先立つもの：予定

2008-03-29 21:12:26 | キリスト教神学第４巻

＜2008年3月21日～2008年3月29日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学第４巻、ミラード・J・エリクソン著」：74～98頁

＜救いに先立つもの：予定＞

今回の箇所には予定について書かれていました。

カルヴァン主義とか、アルミニウス主義とか。

私は、人間の側から見ると、自由に行動したり考えたりしているけど、実際は、人間の生まれる前から、その人はどう行動したり考えたりするかは、全て決まっていると思います。

こういう考え方は、カルヴァン主義の範疇だそうです。

●救いの始まり：主観的側面

2008-04-08 19:49:51 | キリスト教神学第４巻

＜2008年3月30日～2008年4月7日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学第４巻、ミラード・J・エリクソン著」：99～120頁

＜救いの始まり：主観的側面＞

今回の箇所は、救いの始まりについて書かれていました。

救いに関しては、人それぞれの体験があるようです。

一様に神秘的なことがあるとは限らないようです。

自分は、このように救われたと言っても、それが他人にも当てはめられるとは限りません。

難しいものです。

ボクの場合は、最初、不思議な体験をしました。

統合失調症を発病し、それに伴う不思議な体験を沢山しました。

このことにより、目に見える世界が全てでは無い。

良く分からないが、目に見えない世界があると思いました。

また、超自然的な、神のような存在があると感じました。

それから、少しずつキリスト教に触れて行き、信仰を持つようになりました。

●救いの始まり：客観的側面

2008-04-16 19:14:03 | キリスト教神学第４巻

＜2008年4月8日～2008年4月15日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学第４巻、ミラード・J・エリクソン著」：121～144頁

＜救いの始まり：客観的側面＞

救いの始まりの中の一つの現象として、キリストとの結合と言われるものがあります。

クリスチャンは、キリストと結合した状態になります。

でも、今私はあんまり実感が無いです。

昔、キリスト教に回心した時は、そのような実感があったのですが。

今は、病気の症状も落ち着いてきていて、そういう実感があまり無くなってきています。

でも、キリスト教に対する興味は、深まるばかりです。

神を知りたいと強く願っています。

●救いの継続

2008-04-28 23:03:01 | キリスト教神学第４巻

＜2008年4月16日～2008年4月28日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学第４巻、ミラード・J・エリクソン著」：145～164頁

＜救いの継続＞

今回の箇所では救いの継続について書かれていました。

救いというものは、一回義認された後に、聖化の過程を辿ります。

この聖化の過程が救いの継続と言うことです。

これは、義認の後に、起こるもので、一生涯続きます。

聖化が生きている間に終わるかどうかについては、キリスト教内

で意見の違いがあるようです。

生きている間に聖化が終わり、完全なクリスチャンになると主張

するグループと、生涯聖化の過程は終わらないとするグループが

あるようです。

●救いの完成

2008-05-18 15:39:17 | キリスト教神学第４巻

＜2008年5月17日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学第４巻、ミラード・J・エリクソン著」：165～186頁

＜救いの完成＞

最近、別の神学書を読んでいたため、このブログの更新が滞ってしまいました。

でも、また復活です。

今回読んだ箇所には、救いの完成について書かれていました。

救いの完成とは、栄化を示しています。

それは、死んだ後、もしくは、終末の時に、復活し新しい体などを貰えることを指しています。

そして、今生きている生涯では分からなかったことが分かるようになったり、さまざまな特典（？）があります。

あと、堅持についても書かれていました。

堅持と言うのは、救われた人がキリスト教から離れずに、一生を過ごすことを示しています。

この堅持については、２つの解釈があります。

一つは、救われた人は絶対に一生救いからは外されることは無いと言うものです。

これは、カルヴァン主義です。

もう一つは、救われた人でも、救いから外されることがあると言うものです。

これは、アルミニウス主義と呼ばれています。

●救いの手段と範囲

2008-05-29 21:46:19 | キリスト教神学第４巻

＜2008年5月18日～2008年5月29日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学第４巻、ミラード・J・エリクソン著」：187～208頁

＜救いの手段と範囲＞

救いの手段については、色々な説があるそうです。

ここでは、３つの手段について書かれていました。

一つ目は、解放の神学

二つ目は、サクラメンタリズム

三つ目は、福音主義的な救いの手段

解放の神学に関しては、その救いと言うのが、社会的な弱者救済的側面が強いようです。

サクラメンタリズムに関しては、サクラメントにより救われるとするもののようです。

サクラメントと言うのは、キリスト教の儀式のことを指します。

このサクラメンタリズムは、カトリックが採用している教理のようです。

福音主義的な救いと言うのは、信仰のみにより救われると言うものです。

あと、救いの範囲について。

救いの範囲については、２種類の考え方があるようです。

一つは、万人救済主義

もう一つは、普通の救済

万人救済主義は、全ての人が救われるとするもの。

もう一つの普通の救済は、神により選ばれた一部の人のみ救われるとするもの。

●教会の本質

2008-06-15 18:30:21 | キリスト教神学第４巻

＜2008年5月30日～2008年6月15日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学第４巻、ミラード・J・エリクソン著」：209～238頁

＜教会の本質＞

（１）教会は本来、社会現象としてではなく神によって建てられた制度ととらえるべきです。

したがってその本質は教会活動を分析することからではなく、聖書から決められるべきです。

（２）教会は三位一体の神との関係のゆえに存在します。教会の主の意志を聖霊の力によって実行するために存在します。

（３）教会使命はこの世における主の臨在を表し、宣教を継続することです。

（４）教会は、自分たちの主の霊的特質を示す、再生した信仰者たちの交わりであるべきです。純粋さと献身が強調されるべきです。

（５）教会は神に創造されたものであるが、不完全な人間で構成されています。

自らの主の再臨まで、完全な聖さや栄化には到達しません。

●教会の役割

2008-06-21 18:01:59 | キリスト教神学第４巻

＜2008年6月16日～2008年6月20日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学第４巻、ミラード・J・エリクソン著」：239～261頁

＜教会の役割＞

教会の機能として以下の４つがあります。

伝道

建徳

礼拝

社会的関心

○伝道について

これは、イエス・キリストの言葉、大宣教命令に由来します。

「それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。」

マタイ２８章１９節

「しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。

そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、および地の果てにまで、

私の証人となります。」使徒１章８節

●教会の政治

2008-07-05 18:08:39 | キリスト教神学第４巻

＜2008年6月21日～2008年7月5日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学第４巻、ミラード・J・エリクソン著」：262～281頁

＜教会の政治＞

教会を運営していくにあたって、どのような形態があるのでしょうか。

そのことについて今回の箇所で語られていました。

１）監督制

これは、君主制に似ている政治形態です。

昔の人々にとってなじみやすい政治形態だったと思われます。

２）長老制

これは、代議員制に似ている政治形態です。

監督制より民主主義に近い形態です。

３）会衆制

これは、直接民主主義に似ている政治形態です。

日本で言うと、自治会みたいなものでしょうか。

４）非統治制

可能な限り組織を持たない政治形態です。

●教会の入会儀礼：バプテスマ

2008-07-13 21:41:25 | キリスト教神学第４巻

＜2008年7月6日～2008年7月13日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学第４巻、ミラード・J・エリクソン著」：282～302頁

＜教会の入会儀礼：バプテスマ＞

今回の箇所には、バプテスマについて語られました。

イエス・キリストと共に磔になった犯罪者は、バプテスマを受けることなく救われると言う経験をしています。

今回の箇所には、このことにも触れられていました。

バプテスマは、必ずしも救いの条件では無いとのこと。

ただ、教会の一員となるしるしとして、バプテスマを受けることが必要になるとのこと。

あと、幼児洗礼についても語られていました。

幼児洗礼を認めるかどうか。

ここは、プロテスタントの各教派でも意見が分かれるところだと思います。

あと、洗礼は、浸礼にするのか、滴礼を認めるかとか。

僕は、浸礼で受けたので、バプテストの教会に行っても大丈夫です。

バプテストの教会は、基本的に浸礼しか認めないそうなので。

●教会の継続儀礼：主の晩餐

2008-07-27 21:59:50 | キリスト教神学第４巻

＜2008年7月14日～2008年7月27日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学第４巻、ミラード・J・エリクソン著」：303～326頁

＜教会の継続儀礼：主の晩餐＞

主の晩餐と言うと、聖餐式のことです。

この聖餐式と言うのは、クリスチャンになった人にパンとぶどう液（もしくはぶどう酒）をふるまう式のことを言います。

僕の通っている教会では、月の始めの礼拝で、行われています。

うちの教会では、他の教会で洗礼を受けた人でも、同じ信仰を告白しているなら、一緒に受けることができます。

同じ信仰と言うと福音主義の信仰になると思います。

まだ、洗礼を受けていない人は、聖餐式を受けることはできません。

●教会の一致

＜2008年7月28日～2008年7月29日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学第４巻、ミラード・J・エリクソン著」：327～348頁

＜教会の一致＞

僕が教会の一致で思い浮かべるのは、エキュメニカル運動です。

この運動は、教会の各派を統合しようと言う運動です。

でも、それは困難なことだと思います。

やはり、教理的な違いを克服するのは難しいと思われます。

●終末論への序論

2008-08-04 21:47:29 | キリスト教神学第４巻

＜2008年7月30日～2008年8月3日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学第４巻、ミラード・J・エリクソン著」：349～368頁

＜終末論への序論＞

さて、今回からいよいよ終末論に入って行きます。

神学書では、いつも最後方に出てくるのが終末論です。

はたして、ミラード・Ｊ・エリクソン先生はどのようにこの論述をしているのでしょうか。

楽しみな章です。

終末論には、幾つかの見解があるようです。

１．未来主義的見解

　　終末論は、未来に起こることを示している。

２．過去主義的見解

　　終末論は、過去に起こったことを示している。

３．歴史主義的見解

　　終末論は、過去に起こったことと、これから起こることの両方を示している。

４．象徴主義的または観念主義的見解

　　終末論は、時間的な流れの中で見るべきではない。

　　終末論は、時間を超越している。

●個人的終末論

2008-08-10 20:00:43 | キリスト教神学第４巻

＜2008年8月4日～2008年8月10日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学第４巻、ミラード・J・エリクソン著」：369～390頁

＜個人的終末論＞

今回の箇所では、個人的な終末論について書かれていました。

人は、死んだらどうなるのか。

天国に行くとして、死んでから天国に行くまでの中間状態はあるのだろうか。

煉獄とは何か。

そんな感じのことが書かれていました。

●再臨とその結果

2008-08-15 19:31:04 | キリスト教神学第４巻

＜2008年8月10日～2008年8月15日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学第４巻、ミラード・J・エリクソン著」：391～414頁

＜再臨とその結果＞

この本もそろそろ終わりに近づいてきました。

あと、もうひとふんばりです。

今回の箇所では、再臨のことについて書かれていました。

再臨と言うのはイエス・キリストが地上に降臨することを指します。

その時期なのですが、いつになるかは分からないそうです。

再臨に伴い、死んだクリスチャンは復活するそうです。

幽霊のように肉体を持たない復活ではなくて、新しい体を持って復活するようです。

もう、病気とかを起こさない完全な体を貰えるそうです。

●千年期と患難時代についての諸見解

2008-08-15 21:35:37 | キリスト教神学第４巻

＜2008年8月15日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学第４巻、ミラード・J・エリクソン著」：415～437頁

＜千年期と患難時代についての諸見解＞

この本も残り少なくなってきました。

今日はラストスパートと言うことで、２回目の更新です。

千年期とは、キリストが支配する千年の時代を言い表しています。

この千年期の前にキリストが降臨するのか、この千年期の後にキリストが降臨するのか、

意見が分かれています。

あと、もう一つ、無千年期説と言うのもあります。

あと、患難時代はいつ来るのか？

キリストの再臨前に来るのか？

携挙の後か前か。

携挙とは、クリスチャンが地上から天にあげられることを指します。

●最終の状態

2008-08-15 23:54:38 | キリスト教神学第４巻

＜2008年8月15日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学第４巻、ミラード・J・エリクソン著」：438～457頁

＜最終の状態＞

今日はこの本を読むのを、ラストスパートしています。

今日、３回目の更新です。

人は死んだ後、どのような状態になるのでしょうか。

２つの道があります。

天国か地獄か。

天国に行く人が皆同じ待遇とは限らないようです。

それぞれ様々な報いがあるそうです。

●結びの短章

2008-08-16 00:01:03 | キリスト教神学第４巻

＜2008年8月15日に読んだ箇所＞

「キリスト教神学第４巻、ミラード・J・エリクソン著」：458～463頁

＜結びの短章＞

今日で、ミラード・J・エリクソン先生のキリスト教神学、全巻読み終わりました。

長かったです。

でも、楽しかった。

今回の箇所では、キリスト教の神学を知っていても、その実践が無いといけない、というようなことが書かれていました。

**08.総説キリスト教**

●第１章　ナザレのイエス

2008-08-20 21:28:18 | 総説　キリスト教

＜2008年8月16日～2008年8月20日に読んだ箇所＞

「総説　キリスト教・はじめての人のためのキリスト教ガイド」

アリスター・E・マクグラス著

1～78頁

＜第１章　ナザレのイエス＞

さて、いよいよ新しい本に入って行きます。

今度、読む本は、アリスター・E・マクグラスさんの本です。

この本は、最近、日本語の訳本が発売されました。

早速入手しました。

内容は、僕にとっては難しくありません。

ただ、キリスト教にはじめて触れる人にとっては難しい本ではないかと思います。

本のタイトルの副題に「はじめての人のためのキリスト教ガイド」とありますが、ちょっと合ってないような気がします。

こういう副題は付けない方が良かったと思いました。

この本は、ある程度教会に通った人が読む本だと思います。

今回読んだ箇所には、イエス・キリストについて書かれていました。

イエス・キリストは、ナザレのイエスとも呼ばれていました。

ナザレと言うのは、イスラエルにあった村の一つです。

そこでイエスは育ちました。

なので、ナザレのイエスと言う称号が付けられました。

キリストと言うのは、メシア（救世主）のことを表しています。

メシアはヘブル語で、キリストはギリシャ語です。

メシアもキリストも共に救世主と言う意味です。

キリストはイエスの姓ではありません。

イエス・キリストは、救世主イエスと言う意味です。

あと、イエスと言う名の意味は、「神はすくいたもう」だそうです。

と言うことで、第１章の内容のほんの一部の紹介を終了します。

●第２章　聖書入門

2008-09-01 22:58:06 | 総説　キリスト教

＜2008年8月21日～2008年9月1日に読んだ箇所＞

「総説　キリスト教・はじめての人のためのキリスト教ガイド」

アリスター・E・マクグラス著

79～118頁

＜第２章　聖書入門＞

どうも、こんにちは。

ふかごろうです。

総説キリスト教読んでいますよ～。

この本は、かなりのページ数があるけど文字がでかくて行間が広いので、結構さくさく読めます。

内容もそれほど難しく無いです。

さて、今回読んだ箇所について。

聖書とは、歴史書であり真理の書かれた書であります。

でも、クリスチャンにとってはそれ以上の価値のある本です。

あと、聖書の読み方について書かれていました。

１．朗読

２．黙想

３．祈り

４．観想

こんな感じの順序で読んだ箇所を味わうといいみたいです。

僕は、こういう感じにはやっていませんでした。

１．の朗読だけやっています。

●第３章　旧約聖書

2008-09-08 23:41:16 | 総説　キリスト教

＜2008年9月2日～2008年9月8日に読んだ箇所＞

「総説　キリスト教・はじめての人のためのキリスト教ガイド」

アリスター・E・マクグラス著

119～168頁

＜第３章　旧約聖書＞

どうも、こんばんは。

ふかごろうです。

「総説　キリスト教」読んでいますよ。

この本、読み応えがあります。

今回の箇所では、旧約聖書の概観をしていました。

モーセ５書、歴史書、預言書などの説明がありました。

あと、イスラエルの歴史が書かれてありました。

アブラハムからモーセ、ダビデ、ソロモンなどなど。

出エジプトのできごとから、捕囚、そして捕囚からの帰還まで。

●第４章　新約聖書

2008-09-18 20:30:52 | 総説　キリスト教

＜2008年9月9日～2008年9月18日に読んだ箇所＞

「総説　キリスト教・はじめての人のためのキリスト教ガイド」

アリスター・E・マクグラス著

169～198頁

＜第４章　新約聖書＞

どうも、こんばんは。

ふかごろうです。

今回の箇所は新約聖書について書かれていました。

福音書の成り立ちについての諸説を紹介していたり、書簡や使徒行伝やヨハネの黙示録などの簡単な説明があったりしました。

福音書は、マルコの福音書が最初に書かれ、それを元にマタイの福音書とルカの福音書が書かれた、と言うような説が載っておりました。

このマルコ最初説以外の説も載っておりました。

どれが本当なのでしょうね。

それは、天国に行ってからのお楽しみ。

天国に行くと完全な知識が得られるとのことなので、楽しみにしています。

●第５章　キリスト教の信仰内容の背景

2008-09-20 19:20:06 | 総説　キリスト教

＜2008年9月19日～2008年9月20日に読んだ箇所＞

「総説　キリスト教・はじめての人のためのキリスト教ガイド」

アリスター・E・マクグラス著

199～226頁

＜第５章　キリスト教の信仰内容の背景＞

どうも、こんばんは。

ふかごろうです。

マクグラス先生の本、ぼちぼち読んでいますよ～！！

今回の箇所には、キリスト教信仰の内容について書かれていました。

聖書、伝統、信条、理性、この４つがキリスト教信仰の元になっているようです。

プロテスタントでは、聖書を重要視しますが、伝統も無視しているわけでは無いようです。

聖書の解釈の仕方に伝統が関わって来ます。

聖書を好き勝手に解釈すると異端やカルトになってしまいます。

そのへんを注意する必要があると思います。

●第６章　キリスト教信仰の核---概要

2008-10-05 19:04:44 | 総説　キリスト教

＜2008年9月21日～2008年10月5日に読んだ箇所＞

「総説　キリスト教・はじめての人のためのキリスト教ガイド」

アリスター・E・マクグラス著

227～342頁

＜第６章　キリスト教信仰の核---概要＞

ふは～、今日やっと６章が読み終わった。

結構ページ数があって、読み応えがありました。

今日の箇所では、三位一体とか救済とか恵みとか教会とかサクラメントとか他の宗教とか天国とか。

多岐に渡り書かれていました。

三位一体とは難しい教理だと思います。

父、子（イエス・キリスト）、聖霊、の三つが一つ。

水が氷や液体、水蒸気の三つになるように、神様も一つなのだけど、三つ。

●第７章　キリスト教の歴史---略史

2008-10-25 21:29:41 | 総説　キリスト教

＜2008年10月6日～2008年10月25日に読んだ箇所＞

「総説　キリスト教・はじめての人のためのキリスト教ガイド」

アリスター・E・マクグラス著

343～488頁

＜第７章　キリスト教の歴史---略史＞

いや～、やっと７章が読み終わりました。

長かった。

１４０ページ以上あってなかなか読み終わらなかった。

僕は、この本以外の信仰書も平行して読んでいるので、読書の時間を全てこの本に費やしているわけじゃないので、なかなかこの本読み終わりません。

今回の箇所には、キリスト教の歴史が書かれていました。

新約聖書後の教父時代から、第二次世界大戦ごろまでの歴史が書かれていました。

内容は濃かったです。

●第８章　キリスト教---グローバルな視点で

2008-11-07 22:00:50 | 総説　キリスト教

＜2008年10月26日～2008年11月7日に読んだ箇所＞

「総説　キリスト教・はじめての人のためのキリスト教ガイド」

アリスター・E・マクグラス著

489～557頁

＜第８章　キリスト教---グローバルな視点で＞

いや～、８章もかなり読むのに時間が掛かりました。

現代のキリスト教をグローバルな視点で見ている章でした。

キリスト教と言うと西洋の宗教だと言うイメージがありますが、

現代社会を見てみると、それが段々変わりつつあるようです。

例えば韓国とかキリスト教の勢いが凄いです。

中国でもかなりのクリスチャンが居るそうです。

あと、今日のアメリカの教会事情などが書かれていました。

急成長したアメリカの教会の分析などが行われていました。

その中で面白いと感じたのは、細胞教会と呼ばれるものです。

細胞教会は、最初６人から８人で始まり、１５人程度まで成長したら、

それが二つに分裂します。

これを繰り返して教会を成長させて行くのです。

この方法は面白いと思いました。

●第９章　信仰生活

2008-11-16 01:22:05 | 総説　キリスト教

＜2008年11月8日～2008年11月15日に読んだ箇所＞

「総説　キリスト教・はじめての人のためのキリスト教ガイド」

アリスター・E・マクグラス著

558～663頁

＜第９章　信仰生活＞

いや～、やっとこの本読み終わりました。

８月１０日から読み始めたので、３ヶ月ほど掛かりました。

僕は、毎日この本だけしか読んでいるわけではないので、他の本も読んでいるので、スローペースになりました。

本の内容は良かったですよ。

ただ、副題に「はじめての人のためのキリスト教ガイド」ってあるけど、はじめての人にとっては難しいと思います。

人にもよると思いますけど、あまりはじめての人にはお勧めできないです。

入門書は、もっと薄い本で価格も安くしないとだめだと思います。

この本は、洗礼を受けた後のクリスチャン向けには良いと思います。

キリスト教の基礎を学ぶのには最適かと思います。

さて、今回の箇所では、キリスト教の信仰生活について書かれていました。

教会の各種のイベント、イースターやクリスマス、ペンテコステなどなど、説明がなされていました。

他には、洗礼やキリスト教の結婚式、葬式などなど。

また、教会建築やイコン、ステンドグラス、キリスト教音楽などについても書かれていました。

**09.神を愛するための神学講座**

●神を愛するための神学講座

2008-12-09 23:41:46 | 神を愛するための神学講座

＜2008年11月16日～2008年12月9日に読んだ箇所＞

「神を愛するための神学講座」

水草修治著

1～159頁（全ページ読みました）

＜神を愛するための神学＞

今日は、以前購入していて読む予定だったこの本を読みました。

この本は、キリスト教神学の要約だと思いました。

最後の方の章に、なぜ「神を愛するための神学講座」という本のタイトルにしたか、理由が述べられていました。

それは、神学において、神を愛さない神学と言うのもありえるとのこと。

これは、肝に命じておかなくてはならないことだと思います。

知識としてだけの神学は、現代の律法学者やパリサイ人を生み出すことになります。

いくら、神の知識だけ増えても、神との実際的な交わりがなければ無意味なことなのでしょう。

このへんは注意しなくてはならないな。

**10.組織神学**

●第１章から第３章まで

2008-12-29 20:53:12 | 組織神学

＜2008年12月10日～2008年12月29日に読んだ箇所＞

「組織神学」

ヘンリー・シーセン著

1～108頁

＜第１章から第３章まで＞

皆さんこんばんは。

いかがお過ごしでしょうか。

僕は、今月に入り、シーセンの組織神学を読み始めました。

この本は古い本で、日本語版の初版は1961年4月15日発行だそうです。

僕が生まれる前に出版された本です。

長いことこの本は、日本の組織神学のスタンダードになっていたそうです。

神学校で、教科書として使われていたと言う話も聞いたことがあります。

古い本なので、今と時代背景が違います。

当時は、合理主義一辺倒に突き進むような時代だったと思いますが、現在は、心の時代と言いますか、人の心に関心がある時代になったと思います。

その辺を吟味して読む必要があると思います。

ただ、神学と言うのは、それほど変化していないと思います。

神の性質は、時代が変わっても、変化しないからです。

今回読んだところには、神学のイントロダクションと言うべき記述がありました。

神学とは何か。

神の定義とは。

そんな感じのことが論じられていました。

●第４章から第７章まで

2009-01-12 18:59:41 | 組織神学

＜2008年12月30日～2009年1月12日に読んだ箇所＞

「組織神学」

ヘンリー・シーセン著

109～192頁

＜第４章から第７章まで＞

今回の箇所には、非キリスト教的世界観（第４章）や、聖書について（第５～７章）書かれていました。

非キリスト教的観の部分には、無神論、不可知論、汎神論、多神論、二元論、理神論について書かれていました。

このどれもが、キリスト教とは相容れない論理のようです。

第５章からは、聖書について書かれていました。

聖書は、神の啓示の一つです。

そして、神の霊感によって書かれた書物であります。

聖書は、原典において、無謬性とか無誤性があるとされています。

●第３部神論

2009-01-27 22:46:39 | 組織神学

＜2009年1月13日～2009年1月27日に読んだ箇所＞

「組織神学」

ヘンリー・シーセン著

193～310頁

＜第３部神論＞

どうも、こんにちは。ふかごろうです。

この本をぼちぼち読んでいます。

ちょっとスローペースですが、少しずつ前進しています。

さて、今回の箇所は、神論です。

神について論じられていました。

三位一体とか、その他もろもろ。

聖定とか摂理とかについても書かれていました。

聖定の教理によると、人がどういう運命をたどるかは、人が生まれる前から定まっているようです。

でも、宿命論とは違うそうです。

どう違うのでしょうか。

良くは分かりませんでした。

私は、この世で起こっている事象には、偶然というものは無いと思っています。

全ては、神のご計画のうちに起こっていると思います。

つまり全ては必然なのだと思います。

●第４部天使論

2009-02-05 23:09:30 | 組織神学

＜2009年1月28日～2009年2月5日に読んだ箇所＞

「組織神学」

ヘンリー・シーセン著

311～350頁

＜第４部天使論＞

今回の箇所には、天使について書かれていました。

有名な天使には、ガブリエルとかミカエルが居ます。

ミカエルが天使の長だそうです。

また、堕落した天使として、ルシファーが居ます。

イザヤ書14章12節に「明けの明星」と訳されている言葉が英語の欽定訳聖書では、ルシファーと言うみたいです。

このルシファーは、サタンの別名とも言われています。

●第５部人間論

2009-03-15 21:39:35 | 組織神学

＜2009年2月6日～2009年3月14日に読んだ箇所＞

「組織神学」

ヘンリー・シーセン著

351～450頁

＜第５部人間論＞

今回読んだ箇所は人間論です。

人は、皆罪びと。

キリスト教には原罪と言う教理があります。

最初の人アダムが堕罪してから、全ての人類は罪の中に居るようになりました。

●第６部救拯論・第一項救いの準備

2009-05-22 22:02:16 | 組織神学

＜2009年3月15日～2009年5月22日に読んだ箇所＞

「組織神学」

ヘンリー・シーセン著

451～564頁

＜第６部救拯論・第一項救いの準備＞

この日記更新するのは久しぶりになりました。

でも、この本、読んでいます。

今回の箇所では、救拯論に入りました。

救拯論とは何なのか。

とりあえず、文字が音読できません。

さっきネットで調べたのだけど、もう忘れてしまいました。

意味は、「救い論」と言うことだそうです。

イエス・キリストは、十字架に架かり、人類の罪を背負って死なれたのです。

そして、３日目に復活なさいました。

これによって、クリスチャンは救われることになったのです。

●第６部救拯論・第二項救いの適用・第一目救いの適用の開始

2009-06-03 22:16:38 | 組織神学

＜2009年5月23日～2009年6月3日に読んだ箇所＞

「組織神学」

ヘンリー・シーセン著

565～620頁

＜第６部救拯論・第二項救いの適用・第一目救いの適用の開始＞

相変わらず「救拯論」の文字の音読ができないふかごろうです。

一度、ネットで調べたら読み方が書いてあったのですが、忘れてしまいました。

その後、またネットで調べたのだが、どこに読み方が書いてあるのか分からなくなりました。

「ダメじゃん。ダメダメじゃん。」（←ふかごろうの知人の口ぐせです。）

この文章を読んでいる人で読み方が分かる方はコメントをくれると嬉しいです。

コメントできない人は、ふかごろうの部屋のＢＢＳにでも書き込んで頂けると助かります。

今回の箇所には、救いについて、色々な角度から論じられていました。

救いには回心が伴うとか。

あと、この本、面白いですよ。

僕はこういうロジックが書かれている本好きです。

●第６部救拯論・第二項救いの適用・第二目救いの適用の持続

2009-06-05 20:23:11 | 組織神学

＜2009年6月4日～2009年6月5日に読んだ箇所＞

「組織神学」

ヘンリー・シーセン著

621～660頁

＜第６部救拯論・第二項救いの適用・第二目救いの適用の持続＞

どうも、こんばんは。

ふかごろうです。

今日もぼちぼちこの本読んでいますよ。

この本、面白いです。

さて、今回の箇所では、堅持について書かれていました。

堅持とは、一度救われた人は、救いからもれることは無いと言う教理です。

この教理があるので、クリスチャンは、安心して生活できるわけなのですね。

●第７部教会論

2009-06-09 21:05:36 | 組織神学

＜2009年6月6日～2009年6月9日に読んだ箇所＞

「組織神学」

ヘンリー・シーセン著

661～716頁

＜第７部教会論＞

どうも、こんばんは。ふかごろうです。

さて、この組織神学の本も残り少なくなってきました。

分厚い本なのですが、わりとさくさく読めます。

さくさく読めるのは、これまで何冊か神学の本を読んでいたおかげだと思います。

で、今回の箇所の内容なのですが、教会論です。

教会は、公同の教会と地域教会の２つに分けられます。

公同の教会とは、今まで教会に所属していた全員が含められている巨大な一つの教会のことを指します。

もう、亡くなった人もいるでしょうが、そういう人も含めた一個の教会です。

これが公同の教会です。

そして、地域教会とは、公同の教会に含められている、それぞれの地域に現存する教会のことを指します。

●第8部終末論

2009-06-23 21:31:48 | 組織神学

＜2009年6月10日～2009年6月23日に読んだ箇所＞

「組織神学」

ヘンリー・シーセン著

717～840頁

＜第8部終末論＞

とうとう、組織神学、読み終わりましたよ。

やったね！

良くこんな分厚い本を読み通せたものだ。

読み終わって嬉しいです。

この次は、キリスト教綱要を読みたいと思っています。

キリスト教綱要は、たまたま近所の古本屋に全巻置いてあったので、一気に全部買いました。

定価の半額以下の値段で買えました。

定価の５分２ぐらいの価格でした。

ラッキー！！

さて、今回読んだ箇所の感想を書いてみますかね。

今回の箇所には、終末について書かれていました。

終末論とは、この世の終わりについて起こる出来事のことについて論じています。

この世の終わり、サタン（悪魔）や悪い人々が永遠の刑罰の中に入れられてしまうと書かれています。

あと、地上を神が支配する１０００年王国についても書かれています。

世の終わりは、天変地異や戦争などが起こるそうです。

あと、終末には、イエス・キリストが再臨します。

この再臨の時期や１０００年王国が起こる時期については、色々な説があって定説は無いみたいなのです。

以上、今回はここまで。

**11.キリスト教綱要第１篇**

●第１篇・創造主なる神を認識することについて・第１章～第５章

2009-07-06 23:10:15 | キリスト教綱要第１編

＜2009年6月24日～2009年7月6日に読んだ箇所＞

「キリスト教綱要I」

カルヴァン著

渡辺信夫訳

1～81頁

＜第１篇・創造主なる神を認識することについて・第１章～第５章＞

どうも、こんばんは。

ふかごろうです。

今回からカルヴァンの「キリスト教綱要」を読み始めました。

最初にフランス王への献呈の辞があったのですが、長い、長い。

それを読み通すのに挫折しそうになりました。

でも、なんとか読み通しました。

それから、本文に入って行き、読みやすくなりました。

第１章から第５章までには、神様を認識することについて書かれていました。

ただ、まだ、神様を認識することについては、語りつくして無い様子です。

この後の章にも続いています。

●第１篇、6章～11章

2009-08-21 20:50:49 | キリスト教綱要第１編

＜2009年7月7日～2009年8月20日に読んだ箇所＞

「キリスト教綱要I」

カルヴァン著

渡辺信夫訳

82～135頁

＜第１篇、第6章～第11章＞

こんばんは。

ふかごろうです。

キリスト教綱要、ゆっくりしたペースだけど、読んでいますよ。

話はずれますがが、今、ブログ編集画面で直接この文章を書いていたのだが、文字の反応が悪い。

僕のブラインドタッチのペースに全然付いてこない。

なので、メモ帳に書いてからコピー＆ペーストすることにしよう。

話を元に戻します。

キリスト教綱要、読んでいます。

今回の箇所には、偶像崇拝を糾弾する文章が載っていました。

様々な例を挙げて偶像礼拝を批判しておりました。

教会でも、昔、聖人崇拝とかあったらしいです。

今でもあるのかな。

そういうのは良く無いと書かれていました。

●第１篇、第12章～第13章

2009-11-09 21:49:30 | キリスト教綱要第１編

＜2009年8月21日～2009年11月9日に読んだ箇所＞

「キリスト教綱要I」

カルヴァン著

渡辺信夫訳

136～187頁

＜第１篇、第12章～第13章＞

こんばんは。

ふかごろうです。

このブログを更新するのは久しぶりになりました。

結婚や引越しで忙しく、この本をあまり読んでなかったのです。

でも、最近、時間に余裕が出てきたので、読むのを再開しました。

今回の箇所には、三位一体の教理の説明がありました。

かなりのページ数をさいて説明が書かれていました。

ただ、難解なので良く分かりませんでした。

●キリスト教綱要第１篇、第１４章～第１５章

2010-03-29 17:54:35 | キリスト教綱要第１編

＜2009年11月10日～2010年3月29日に読んだ箇所＞

「キリスト教綱要I」

カルヴァン著

渡辺信夫訳

188～228頁

＜第１篇、第14章～第15章＞

どうも、こんにちは。

皆さん。

長いことこのブログ放置ぎみだったのだが、５ヶ月ぶりに更新します。

一度、キリスト教綱要、読むのを頓挫していたのだが、最近、また読み始めました。

今回の箇所には、キリスト教の人間論が書かれていました。

人間は、魂を持つ存在であること。

その魂は、不滅であること。

などなど、書かれていました。

また、人間は、最初の人アダムが堕落してから、その性質を受け継いでいるということ。

そのようなことが書かれていました。

●キリスト教綱要第１篇、第16章

2010-04-04 18:13:38 | キリスト教綱要第１編

＜2010年3月30日～2010年4月4日に読んだ箇所＞

「キリスト教綱要I」

カルヴァン著

渡辺信夫訳

229～243頁

＜第１篇、第16章＞

どうも、皆さんこんにちは。

ふかごろうです。

最近、この本読むのを再開しました。

今回の箇所の感想などを書きますね。

今回の箇所は面白かったです。

人生において、偶然は無く、必然しかない。

ただ、運命と言うのもおかしい。

運命と言うと、機械的にその人の人生が決まっているとなるけど。

人生には神様の介在があるのね。

摂理と言うのだけど。

あんまりまとまりの無い文章になったけど。

ま、とりあえずこんな感じに読み解きました。

●キリスト教綱要第１篇、第1７章

2010-04-06 17:44:15 | キリスト教綱要第１編

＜2010年4月5日～2010年4月6日に読んだ箇所＞

「キリスト教綱要I」

カルヴァン著

渡辺信夫訳

244～263頁

＜第１篇、第17章＞

最近、個人的な時間が少し持てるようになってきたので、この本をまた読むようになりました。

今回の箇所には、摂理について書かれていました。

なかなか面白かったです。

摂理については、僕が元々興味を持っていたので、面白く感じたのでしょう。

神様には、元々計画があって、その通りに世界を動かしているのです。

たとえ、悪いことが起こっても、それも神様の手の内にあります。

神様の許可なくては、そのようなことは起こりません。

なので、もし自分に悪いことが起こっても、それが何の意味があるのか、良く考えなくてはならないと思います。

謙虚に生きなくては。

●キリスト教綱要第１篇、第18章

2010-04-08 22:28:25 | キリスト教綱要第１編

＜2010年4月7日～2010年4月8日に読んだ箇所＞

「キリスト教綱要I」

カルヴァン著

渡辺信夫訳

264～274頁

＜第１篇、第18章＞

どうも、皆さんこんにちは。

今日で、第１篇は終了です。

残り、後、３篇あります。

分量的には、全体の６分の１ほど読み終わりました。

まだ、先は長いです。

僕が読んでいるこのキリスト教綱要は、渡辺信夫さんの翻訳で、初版が1962年の本です。

僕が生まれる１０年以上前の本なのです。

もう、４８年も前の本です。

なので、訳語が古いし読みにくいです。

でも、読んでいるうちにだんだん慣れてきて、だんだん面白くなってきました。

さて、神様が全てのできごとの原因なら、悪いことを起こすのも神様と言うことになります。

その場合、神様に罪があると言うことにならないだろうか。

と言うことに対する反論が今回の箇所に納めてありました。

結果が悪くとも、その結果に至るプロセスが善であるか悪であるかによって、罪があるかないか決まってくるようです。

また、人間の目から見て悪い結果でも、神様の目から見ると良い結果である場合もあるでしょう。

今回の箇所は、かなり難しい箇所だと感じました。

また、後日、この部分を読み返し、理解を深めようと思っています。

**12.キリスト教綱要第２篇**

●キリスト教綱要第２篇、第１章

2010-04-10 23:06:38 | キリスト教綱要第２編

＜2010年4月9日に読んだ箇所＞

「キリスト教綱要II」

カルヴァン著

渡辺信夫訳

1～29頁

＜第２篇、第1章＞

皆さん、こんばんは。

今日から、第２篇に突入します。

今回の箇所には、原罪について書かれていました。

人類は、生まれつき罪を持っている存在であると書かれていました。

それは一種の呪いのようなもので、全ての人類がその罪の性質を持っているとのこと。

●キリスト教綱要第２篇、第２章

2010-04-23 16:18:52 | キリスト教綱要第２編

＜2010年4月10日～2010年4月23日に読んだ箇所＞

「キリスト教綱要II」

カルヴァン著

渡辺信夫訳

30～67頁

＜第２篇、第2章＞

いや～お久しぶりです。

４月２０日に、一日で、このブログ、890回の閲覧数がありました。

なぜだ。

なぜこんなに急に増えた。

田代砲でも撃ち込まれたか。

今回の箇所は難解であんまり良く分かりませんでした。

章のタイトルを引用してみようと思います。

「人間は　いまや　自由意志を奪われ　悲惨な奴隷の位置に置かれている．」

人間の自由意志ってなんなのだろうね。

皆、自由意志ってあると思っているよね。

でも、サタン（悪魔）にあやつられているのかもね。

そういう意味で、自由意志って無いのかもしれません。

●キリスト教綱要第2篇、第3章

2010-05-28 19:18:35 | キリスト教綱要第２編

＜2010年4月24日～2010年5月28日に読んだ箇所＞

「キリスト教綱要II」

カルヴァン著

渡辺信夫訳

68～92頁

＜第2篇、第3章＞

先月（2010年4月）は、自分の時間が取れたので、この本を読むことができたのだが、今月になり自分の時間が持てなくなった。

なので、なかなか読書が進まなかった。

でも、ようやく第3章を読み終わりました。

人間の意志について書かれていました。

神の方向に向く意志と言うものは、神の恩寵によるものだと書かれていました。

神の恩寵によらなければ、我々人間は、神の方向に向くことはできない。

我々人間の意志によりなしうる全てのことは、みな恩寵によります。

●キリスト教綱要第2篇、第4章

2010-06-01 17:07:03 | キリスト教綱要第２編

＜2010年5月29日～2010年6月1日に読んだ箇所＞

「キリスト教綱要II」

カルヴァン著

渡辺信夫訳

93～101頁

＜第2篇、第4章＞

こんにちは。

ふかごろうです。

今回読んだ章のタイトルを引用してみますね。

「神は　どのようにして　人間の心のうちに働きたもうか．」

とあります。

神様は、人間の心に、良いことにせよ、悪いことにせよ、働きかけます。

心の衝動を与える。

人間は、自分の思いで行動していると思っているけど、その思いは神様が与えています。

●キリスト教綱要第2篇、第5章

2010-06-28 21:42:31 | キリスト教綱要第２編

＜2010年6月2日～2010年6月28日に読んだ箇所＞

「キリスト教綱要II」

カルヴァン著

渡辺信夫訳

102～130頁

＜第2篇、第5章＞

こんばんは。

ふかごろうです。

今回の箇所には、次の言葉が書かれていました。

「人間の精神は完全に神の義からそむき去っているので、

そこでは不敬虔、ねじけた、醜悪な、不純な、破廉恥なこと以外、

何ひとつ考え、願い、くわだてることができないほどである。」

人間の本性は、こういうものなのだろうね。

人間が善なることを行うのは、全て神様の働きなのでしょう。

●キリスト教綱要第2篇、第6章

2010-08-02 18:35:36 | キリスト教綱要第２編

＜2010年6月29日～2010年8月2日に読んだ箇所＞

「キリスト教綱要II」

カルヴァン著

渡辺信夫訳

131～139頁

＜第2篇、第6章＞

どうも、こんばんは。

ふかごろうです。

少し間があきましたが、この本読んでいますよ。

今日の箇所には、贖いはキリストのうちに求めなくてはならないと書かれていました。

天地を創造した神を認識できても、キリストを求めなくては、救いはないのでしょう。

天地を創造した神と、人間の間には、越えられない壁があります。

その壁を破ったのは、イエス・キリストです。

●キリスト教綱要第2篇、第7章

2010-08-11 21:08:16 | キリスト教綱要第２編

＜2010年8月3日～2010年8月11日に読んだ箇所＞

「キリスト教綱要II」

カルヴァン著

渡辺信夫訳

140～160頁

＜第2篇、第7章＞

今回の箇所には、律法について書かれていました。

人間は、律法を全て守ることはできないと書かれていました。

人間は、生まれながら罪人です。

律法があることにより、人間は、自分が罪人であることを認識することになります。

その罪人を救うのがイエス・キリストなのですね。

●キリスト教綱要第2篇、第8章

2010-09-28 00:54:04 | キリスト教綱要第２編

＜2010年8月12日～2010年9月27日に読んだ箇所＞

「キリスト教綱要II」

カルヴァン著

渡辺信夫訳

161～222頁

＜第2篇、第8章＞

今回読んだ8章は、長かったです。

61ページもあります。

この本は、2段組みになっていて、さらに小さい字で印刷されています。

なので、文庫本に換算すると、倍の122ページぐらいの分量はあると思います。

長かった。

今回の箇所には、十戒について書かれていました。

十戒には、

「わたしを憎む者には、父の咎を子に報い、三代、四代にまで及ぼし、」

と言う箇所があるのだが、ちょっと疑問に思っていました。

聖書の他の箇所では、

「罪を犯した者は、その者が死に、子は父の咎について負い目がなく、父も子の咎について負い目がない。正しい者の義はその者に帰し、悪者の悪はその者に帰する。」

（エゼキエル書18章20節）

とあるのです。

どちらが本当なのでしょう。

この本には、その考察が載っていたのだが、良く分かりませんでした。

●キリスト教綱要第2篇、第9章

2010-10-06 20:20:41 | キリスト教綱要第２編

＜2010年9月28日～2010年10月6日に読んだ箇所＞

「キリスト教綱要II」

カルヴァン著

渡辺信夫訳

223～229頁

＜第2篇、第9章＞

今回読んだ第９章は、わずか、７ページしかありません。

前回読んだ箇所は、６１ページもありました。

なんかページの配分がめちゃくちゃな気がします。

読む人のことを考え、章の長さはある程度同じにして欲しいものです。

と言っても、カルヴァンさんは、もう亡くなっているのでどうにもなりませんね。

ただ、この本の読みにくさは、訳文にあるのかもしれない。

最近、新しい訳の本が出たので、そちらを購入すれば良かったかも。

今、読んでいる訳は古くて、難しい言い回しがあります。

さて、前置きはこなぐらいにして、内容に触れましょうか。

今回の箇所の表題を転記しましょう。

「キリストは　ユダヤ人には　律法のもとに知られていたが　福音によってこそ　十分に示されたもうた。」

キリストは、旧約聖書に書いてあるように、昔、ユダヤ人に知られていました。

しかし、イエス・キリストの到来後、その福音により、はっきりと示されたのです。

●キリスト教綱要第2篇、第10章

2010-10-17 18:26:22 | キリスト教綱要第２編

＜2010年10月7日～2010年10月17日に読んだ箇所＞

「キリスト教綱要II」

カルヴァン著

渡辺信夫訳

230～253頁

＜第2篇、第10章＞

今回の箇所には、旧約と新約の類似について書かれていました。

ヘブル人の手紙から引用しますね。

「これらの人々はみな、信仰の人々として死にました。

約束のものを手に入れることはありませんでしたが、

はるかにそれを見て喜び迎え、

地上では旅人であり寄留者であることを告白していたのです。」

　　　　　　　　　　ヘブル人への手紙11章13節

「これらの人々」と言うのは旧約時代の信仰者達のことです。

アブラハムとかノアとかのことです。

旧約時代にも、信仰者は、生きている間に約束のものを手に入れることができなかった、

と書かれています。

つまり、死後、約束されたものが手に入ると言うことです。

これは、現在のクリスチャンにもあてはまることです。

例え、生涯が苦難に満ちていても、約束のものは、死後受け取ることができるのです。

約束のものとは、天国での平穏に満ちた生活だろうと思います。

●キリスト教綱要第2篇、第11章

2010-11-09 20:07:07 | キリスト教綱要第２編

＜2010年10月18日～2010年11月9日に読んだ箇所＞

「キリスト教綱要II」

カルヴァン著

渡辺信夫訳

254～269頁

＜第2篇、第11章＞

今回の箇所には、旧約と新約の相違について書かれていました。

旧約と新約の神様は異なると言う見方があります。

それについて考察されていました。

同じ親でも、自分の子供に対する対応が変わることがあります。

自分の子供がまだ幼児だった時は、幼児に対する対応があります。

自分の子供が大人になった時は、大人になった時の対応があります。

そのように同じ親でも、子の成長に合わせて対応が変わります。

それを神に当てはめて考えると、旧約と新約の神は、同じだけど、人類に対する対応は異なるのではないかと思います。

●キリスト教綱要第2篇、第12章

2010-11-21 19:02:57 | キリスト教綱要第２編

＜2010年11月10日～2010年11月21日に読んだ箇所＞

「キリスト教綱要II」

カルヴァン著

渡辺信夫訳

270～282頁

＜第2篇、第12章＞

今回の箇所には、キリストが人間になる必要があったと言うことについて書かれていました。

キリストが人間になることにより、神と人とを繋ぐ仲保者となりました。

このことは永遠の昔からの定めです。

普通の人間では、神と人との仲保者となることはできません。

●キリスト教綱要第2篇、第13章

2010-12-09 22:03:18 | キリスト教綱要第２編

＜2010年11月22日～2010年12月9日に読んだ箇所＞

「キリスト教綱要II」

カルヴァン著

渡辺信夫訳

283～292頁

＜第2篇、第13章＞

今回の箇所には、キリストが実体のある肉体を持って産まれたと言うことが書かれていました。

いつの時代もそうなのかもしれないが、キリストには肉体が無かったと言う人達がいるみたいです。

普通の人と同じ肉体ではなく、幽霊のような体だったのではないか、と言われることもあったみたいです。

●キリスト教綱要第2篇、第14章

2011-06-14 18:33:42 | キリスト教綱要第２編

＜2011年6月14日に読んだ箇所＞

「キリスト教綱要II」

カルヴァン著

渡辺信夫訳

293～307頁

＜第2篇、第14章＞

様々な事情により中断していた、この綱要を読むこと。

約半年ぶりに復活させようと思います。

今日は、14章を一気に読みました。

この14章には、イエス・キリストの神性と人性について書かれていました。

イエス・キリストは、神ではなく、人である。

イエス・キリストは、神であり、人でない。

この両方の間違った考え方があるようです。

さらに、イエス・キリストは、神でもなく、人でもない。

と言う間違った考え方もあります。

これに対して、カルヴァンは、イエス・キリストは、神であり、なおかつ人でもある、と主張するのです！

●キリスト教綱要第2篇、第15章

2011-06-15 22:38:23 | キリスト教綱要第２編

＜2011年6月15日に読んだ箇所＞

「キリスト教綱要II」

カルヴァン著

渡辺信夫訳

308～318頁

＜第2篇、第15章＞

今回の箇所には、イエス・キリストの職について書かれていました。

イエス・キリストは、３つの職があります。

預言者職、王職、祭司職です。

預言者職については、だいたい分かりますよね。

神様の言葉を取り次いだりするのですよね。

王職については、少し分かりづらいと思います。

イエス・キリストは、地上にいる人間の王様とは異なります。

このイエス・キリストの王職は、霊的なものなのです。

霊的と言う言葉を使うとその説明も必要になるかもしれません。

とりあえず、この世的な富や権力を握っている王様ではないと言うことです。

もちろん、富や権力もイエス・キリストの自由になりますが、そんなちっぽけな存在ではありません。

もっと崇高で力の強い王様なのです。

祭司職については、神と人との仲立ちをしてくれる役目を負っていると言うことです。

そして、普通の祭司と異なるのは、自分自身をいけにえとして捧げたと言うことです。

このことにより、神を信じ救われた人々の罪が赦されることになります。

●キリスト教綱要第2篇、第16章

2011-07-07 17:06:43 | キリスト教綱要第２編

＜2011年6月16日～2011年7月7日に読んだ箇所＞

「キリスト教綱要II」

カルヴァン著

渡辺信夫訳

319～347頁

＜第2篇、第16章＞

今日は、七夕ですね。

少々、時間が掛ったけど、やっと今日16章が読み終わった。

この章では、キリストの死と復活について書かれていました。

キリストの死は、本来、人が受けるべき刑罰を、キリストが身代わりになって受けたことを表しています。

そして、復活。

復活は、人が死んでも、それで終わりではないことを示しています。

●キリスト教綱要第2篇、第17章

2011-07-08 20:18:12 | キリスト教綱要第２編

＜2011年7月8日に読んだ箇所＞

「キリスト教綱要II」

カルヴァン著

渡辺信夫訳

348～356頁

＜第2篇、第17章＞

今日ようやく第2篇が読み終わった。

ここまで来るのは長かった。

でも、まだ先は長い。

今日の箇所には、キリストの功績について書かれていました。

キリストが十字架の死により、罪ある人間の贖いをしました。

この功績により、人間は、神の恵みを受けることができるようになりました。

**13.キリスト教綱要第３篇**

●キリスト教綱要第3篇、第1章

2011-07-10 21:31:34 | キリスト教綱要第３篇

＜2011年7月9日～2011年7月10日に読んだ箇所＞

「キリスト教綱要III/1」

カルヴァン著

渡辺信夫訳

1～19頁

＜第3篇、第1章＞

この綱要を読んで２年ほど経つが、ようやく第3篇に入りました。

この間、結婚したり子供が出来たりして、自分の時間を持つことが困難になりました。

でも、それは苦に感じないです。

妻や子供との時間は、楽しい。

ただ、綱要を読むのにあてる時間は、大幅に減りました。

そんな中でも、少しずつ読み進めています。

さて、今回の箇所には、御霊（みたま）について書かれていました。

御霊とは、聖霊のことです。

この御霊により、我々クリスチャンは、キリストを証したり、また、キリスト教の言わんとすることを理解したりするのです。

この御霊を受けてないと、聖書を読んでも、ピンとこないかもしれません。

●キリスト教綱要第3篇、第2章

2013-02-11 21:31:29 | キリスト教綱要第３篇

＜2011年7月11日～2013年2月11日に読んだ箇所＞

「キリスト教綱要　改訳版　第３篇」

カルヴァン著

渡辺信夫訳

14～68頁（改訳版に変更したので頁が変わっております。）

＜第3篇、第2章＞

前回、このブログにキリスト教綱要の感想をアップしてから、一年以上の月日が経ちました。

息子が生まれ、育児や家事や、その他様々なことにより、この本を読んでいる余裕がありませんでした。

でも、最近、少し時間が取れるようになったので、久しぶりに読みました。

今回から、キリスト教綱要の改訳版を読むことにしました。

改訳版の方が読みやすいと思ったので、そちらに変更しました。

さて、今回読んだところには、信仰について書かれていました。

信仰と言うのは、何か行いによって持つようになるのではなく、神様からの恩寵であるとのことです。

信仰を持つと言うのは、神様側からの働きなのですね。

●キリスト教綱要第3篇、第3章

2013-07-25 22:11:34 | キリスト教綱要第３篇

＜2013年2月12日～2013年7月25日に読んだ箇所＞

「キリスト教綱要　改訳版　第３篇」

カルヴァン著

渡辺信夫訳

69～100頁

＜第3篇、第3章＞

前回、感想をアップしてから、だいぶ経つけど、ようやく、3章が読み終わりました。

この3章は、罪について書かれていました。

聖霊を冒涜する罪とは何か。

聖霊を冒涜する罪は、赦されない。

その罪とは、キリスト教で一度、信仰に入ったのにもかかわらず、その信仰を捨ててしまうこと。

と、カルヴァンは言っておりました。

●キリスト教綱要第3篇、第４章

2013-08-20 21:11:19 | キリスト教綱要第３篇

＜2013年7月26日～2013年8月20日に読んだ箇所＞

「キリスト教綱要　改訳版　第３篇」

カルヴァン著

渡辺信夫訳

101～152頁

＜第3篇、第4章＞

今回の箇所には、罪の償いについて書かれていました。

カトリックでは、懺悔（ゆるし？）と呼ばれるサクラメントがあるけど、これは、間違っているとの主張をカルヴァンはしています。

カルヴァンのおかげでプロテスタントからは、懺悔が外されたのですね。

●キリスト教綱要第3篇、第5章

2013-09-12 15:23:36 | キリスト教綱要第３篇

＜2013年8月21日～2013年9月12日に読んだ箇所＞

「キリスト教綱要　改訳版　第３篇」

カルヴァン著

渡辺信夫訳

153～167頁

＜第3篇、第5章＞

今回の箇所には、浄罪火と死者のための祈りが書かれていた。

この２つの教えは、当時のカトリックの教えだったのですが、

カルヴァンは、間違っていると主張しています。

死者のための祈りは、聖書のどこにも記述が無く、それを行うことは、

あまり意味の無いことのようです。

もちろん、死者のために追悼の意を表すために祈ることはあるでしょう。

それ以上に宗教的な意味はないとのこと。

●キリスト教綱要第3篇、第6章

2013-09-25 23:50:50 | キリスト教綱要第３篇

＜2013年9月13日～2013年9月25日に読んだ箇所＞

「キリスト教綱要　改訳版　第３篇」

カルヴァン著

渡辺信夫訳

168～173頁

＜第3篇、第6章＞

今回の箇所には、名目だけのキリスト者に対する批判などが載っていました。

キリスト者は、生活の中で愛の実践をすることが求められていると思います。

そういうのがないと、名前だけのキリスト者になってしまうような気がします。

●キリスト教綱要第3篇、第7章

2013-10-25 21:43:15 | キリスト教綱要第３篇

＜2013年9月26日～2013年10月25日に読んだ箇所＞

「キリスト教綱要　改訳版　第３篇」

カルヴァン著

渡辺信夫訳

174～185頁

＜第3篇、第7章＞

クリスチャンは、富や名誉を受けても、それを自分の勤勉や努力の結果だと認識するのは、間違っているとのこと。

全ては主の力によります。

また、困難や病気などのわざわいにあっても、主を信頼し、忍耐を持って対応すべきであるとのこと。

●キリスト教綱要第3篇、第8章

2014-02-17 20:01:07 | キリスト教綱要第３篇

＜2014年2月17日に読んだ箇所＞

「キリスト教綱要　改訳版　第３篇」

カルヴァン著

渡辺信夫訳

186～196頁

＜第3篇、第8章＞

今日、読んだ箇所から、気に入った文章を抜粋してみますね。

これです。

↓↓↓

主に選ばれてその民の団体に加わるに相応しいとされた限りの者は、辛苦に満ち、労多く、安らぎなく、多種多様な不幸が纏わりつく生涯を覚悟しなければならない。

●キリスト教綱要第3篇、第9～１１章

2014-08-10 19:53:48 | キリスト教綱要第３篇

＜2014年2月18日～2014年8月10日に読んだ箇所＞

「キリスト教綱要　改訳版　第３篇」

カルヴァン著

渡辺信夫訳

197～241頁

＜第3篇、第9～11章＞

今回、読んだ箇所には、信仰義認について書かれています。

イエス・キリストを信じる信仰によって義とされるのです。

なにか、良い行いをしたから、義とされるのではないです。

このへんのことは、カルヴァン神学の中心になることかもしれないです。

●キリスト教綱要第3篇、第１２～１４章

2014-12-20 14:36:21 | キリスト教綱要第３篇

＜2014年8月11日～2014年12月20日に読んだ箇所＞

「キリスト教綱要　改訳版　第３篇」

カルヴァン著

渡辺信夫訳

242～279頁

＜第3篇、第12～14章＞

最近、この本を読むスピードが落ちたけど、読んでいますよ。

今回の箇所も前回に引き続き、信仰義認について書かれていました。

人が救われるのは、行いによるのではないのですね。

神を信じる信仰によるのですね。

●キリスト教綱要第3篇、第１5～１8章

2015-02-24 22:01:44 | キリスト教綱要第３篇

＜2014年12月21日～2015年2月24日に読んだ箇所＞

「キリスト教綱要　改訳版　第３篇」

カルヴァン著

渡辺信夫訳

280～330頁

＜第3篇、第15～18章＞

なんだか、凄く遅いペースになっているけど、この本、ちびちび読んでいますよ。

今回の箇所には、前回の箇所に引き続き、行いによる義認に対し、反論が載せられています。

何か、良い行いをしたから、義とされる訳では無いとのこと。

確かに、この世を去った後、行いに対する報いはあるかもしれない。

ただ、それは、何か良い行いをしたから、天国に入ることができるわけではない。

●キリスト教綱要第3篇、第１9章

2015-08-24 22:47:56 | キリスト教綱要第３篇

＜2015年2月25日～2015年8月24日に読んだ箇所＞

「キリスト教綱要　改訳版　第３篇」

カルヴァン著

渡辺信夫訳

331～347頁

＜第3篇、第19章＞

今回の箇所には、つまずきについて書かれていました。

異教の祭壇にささげられる肉を食べる時、それと知らずに食べるならそれで良いし。

他の人がその肉のことを指摘する場合は、食べない方が良い。

確か、パウロは、肉を食べないと言っていたような気もします。

それを食べることが、他の人のつまずきなるのを防ぐためだと思います。

ただ、僕は、肉も食べて良いと思います。

●キリスト教綱要第3篇、第20章

2017-02-23 00:03:17 | キリスト教綱要第３篇

＜2017年2月15日～2017年2月22日に読んだ箇所＞

「キリスト教綱要　改訳版　第３篇」

カルヴァン著

渡辺信夫訳

348～424頁

＜第3篇、第20章＞

今回読んだ箇所には、祈りについて書かれていました。

神様に対して祈るのですが、その心構えが書かれています。

おそらく、自分の益になることを祈っても聞かれないかもしれません。

キリスト教は、ご利益宗教じゃないので、例えばお金をくださいと

祈っても聞かれないかもしれません。

ただ、僕は、厚かましくも、お金をくださいと祈ったことが何回か

あります。

その都度、お金が貰えました。

ただ、これは、僕がクリスチャンとして未熟だったので、祈りが聞かれた

のではないかと思います。

クリスチャンとして、成熟していくにつれ、そういう自己中心的な祈りは、

聞かれなくなっていくと思います。

今では、他者のことを自然に祈るようになってきたと思います。

話を少し変えます。

祈りの基本は、主の祈りだそうです。

この主の祈りにそって祈ると良いそうです。

特に、「日ごとの糧を与えたまえ」が印象的でした。

神様は、一度に大量のお金を与えてはくれないかもしれませんが、

日々生活をしていく上で必要なお金は、与えてくれます。

イスラエルの民が出エジプトした後、荒野を旅している時、

マナが与えられました。

マナは、食料になりました。

天から降ってきます。

でも、一日分しか取れません。

次の日の分も残そうとしても腐ってしまったそうです。

安息日の前日は、二日分取っても、腐らなかったそうです。

このように、日々の糧を必要な分、その都度、神様が与えてくださいます。

下手に、大金を与えてしまうと、神様から心が離れてしまうかもしれません。

お金があると、どうしても傲慢になったり、不遜になったりしがちです。

必要な分を日々与えることで、神様に従うことを日々意識するようになります。

神様に従うことの訓練になります。

この訓練により、我々の人格は、整えられて行くと思います。

●キリスト教綱要第3篇、第21～22章

2017-04-07 01:10:41 | キリスト教綱要第３篇

＜2017年2月23日～2017年4月7日に読んだ箇所＞

「キリスト教綱要　改訳版　第３篇」

カルヴァン著

渡辺信夫訳

425～455頁

＜第3篇、第21～22章＞

今回の箇所では、予定について書かれていました。

カルヴァン神学の核となる部分ですね。

カルヴァン主義と呼ばれるものは、この箇所の内容から来ていると思います。

人が救われるかどうかは、生まれる前に決まっているとカルヴァンは主張します。

僕もそう思っています。

そもそも、神様は、我々の時間軸とは別の時間軸の中にいると思われます。

なので、神様とって、過去も現在も未来もないような気がします。

ここで、注意しなくてはならないのは、救いが生まれる前から決まっているからと言って、

伝道しなくても良いとはならないと言うことです。

神様の計画があり、すべては決められているとしても、人にはそれが分かりません。

その中でも、人は、伝道すべきです。

●キリスト教綱要第3篇、第23章

2017-04-07 22:59:37 | キリスト教綱要第３篇

＜2017年4月7日に読んだ箇所＞

「キリスト教綱要　改訳版　第３篇」

カルヴァン著

渡辺信夫訳

456～476頁

＜第3篇、第23章＞

今回の箇所には、神様から遺棄される人のことについて書かれていました。

もし、物事が神様の計画の通りに進んでいて、必然しかないのなら、

救われない人の存在は、不公平ではないか。

生まれる前から、人が救わるかどうか決まっているとは、あまりにも不公平です。

救われない人は何をしても救われない。

これに対し、人を救うか、救わないかは神様の意志によるのです。

その意志は、人間には分からないのです。

なぜそうなるのか、分からないのに、不公平だと断定するのは、人間のおごりではないでしょうか？

神様が人を救うか救わないか、その理由は、ちゃんと存在するのかもしれないです。

ただ、それは人には分からないのです。

●キリスト教綱要第3篇、第24章

2017-04-08 21:38:06 | キリスト教綱要第３篇

＜2017年4月8日に読んだ箇所＞

「キリスト教綱要　改訳版　第３篇」

カルヴァン著

渡辺信夫訳

477～503頁

＜第3篇、第24章＞

今回の箇所も前回に引き続き、予定について書かれていました。

予定に関しては、人の理解を超えている部分があります。

それに対しカルヴァンは、最終的にこう答えています。

「ああ人よ、神と争うお前は何者なのか」（ローマ9：20）

神様の考えが分からないからと言って、神様を糾弾するのは、おかしいと思います。

●キリスト教綱要第3篇、第25章

2017-04-09 21:56:15 | キリスト教綱要第３篇

＜2017年4月9日に読んだ箇所＞

「キリスト教綱要　改訳版　第３篇」

カルヴァン著

渡辺信夫訳

504～527頁

＜第3篇、第25章＞

今回の箇所は、死後、人はどうなるかについて書かれていました。

僕は、死後、天使のような全く新しい体が与えられると思っていました。

そして、記憶と魂とか心とかが、その新しい体に引き継がれると思っていました。

カルヴァンは、それとは少し違うことを書いていました。

肉体は、死ぬ時に一時的に腐敗などをするけど、蘇ると書いていました。

今の肉体は、死後の世界にも引き継がれるようです。

ただ、死んだ時の肉体とは、性質が異なることになるとのこと。

実際どうなるのでしょうね。

これは死んでからのお楽しみですね！

さて、このキリスト教綱要の第３篇は、2011年7月9日から、読み始めました。

ようやく、今日、2017年4月9日、読み終わりました。

長かった。

5年以上かかりました。

でも、まだ、キリスト教綱要は、続きがあります。

第４篇があります。

気の長い話です。

**14.キリスト教綱要第４篇**

●キリスト教綱要第4篇、第1章

2017-04-21 21:40:08 | キリスト教綱要第４篇

＜2017年4月10日～2017年4月21日に読んだ箇所＞

「キリスト教綱要　改訳版　第4篇」

カルヴァン著

渡辺信夫訳

1～39頁

＜第4篇、第1章＞

今回の箇所は、教会について書かれていました。

教会には、救われた人だけではなく、救われてない人も存在するとのこと。

ただ、それを人が判断してはいけないと書かれていました。

人を裁いてはいけないのです。

あと、教会員となってから、罪を犯す場合もあるとのこと。

僕もそうだと思います。

ダビデは救われていたと思いますが、重大な罪を犯しました。

姦淫と、殺人の罪を犯しました。

これは、死罪に当たります。

でも、ダビデは、救われたのです。

なので、人が何か罪を犯しても、その人が罪を認め反省するならば、

教会は、赦しを与えなければなりません。

●キリスト教綱要第4篇、第2章

2017-07-06 23:49:09 | キリスト教綱要第４篇

＜2017年4月22日～2017年7月6日に読んだ箇所＞

「キリスト教綱要　改訳版　第4篇」

カルヴァン著

渡辺信夫訳

40～53頁

＜第4篇、第2章＞

今回の箇所には、カトリックの教会の批判が載っていました。

カルヴァンが生きていた当時のカトリックは、腐敗していたのでしょう。

今のカトリックは、当時ほどは、腐敗していないと思います。

●キリスト教綱要第4篇、第3～6章

2017-12-12 23:28:44 | キリスト教綱要第４篇

＜2017年7月7日～2017年12月12日に読んだ箇所＞

「キリスト教綱要　改訳版　第4篇」

カルヴァン著

渡辺信夫訳

54～123頁

＜第4篇、第3～6章＞

今回の箇所、特に6章には、教皇制度に対する批判が書かれていました。

なぜ、ローマ教会がキリスト教の頂点に立つのか。

聖書に教皇と言う制度に当たるものが書かれているのか。

それに対し、カルヴァンは、教皇制度は、聖書に根拠がないと主張していました。

カルヴァンは、小さな集団において、リーダーのような存在が立てられるのは

良いが、全てのクリスチャンの頂点に立つような人を立てるのは、良くない、

と主張しております。

●キリスト教綱要第4篇、第7～16章

2018-10-16 17:28:44 | キリスト教綱要第４篇

＜2017年12月13日～2018年10月16日に読んだ箇所＞

「キリスト教綱要　改訳版　第4篇」

カルヴァン著

渡辺信夫訳

124～390頁

＜第4篇、第7～16章＞

今回の箇所には、政教分離のこととか、サクラメントのこととか、

幼児洗礼のことなどが書かれていました。

カルヴァンは、政教分離を主張しておりました。

幼児洗礼に関しては、カルヴァンは認めておりました。

＜働かざる者食うべからず＞

今回の箇所で、特別に思うところがありましたので、文章にしました。

以下に記します。

----------記----------

ゴスペルシンガーのMigiwaさんの歌に「15年後のことだった〜♪」（CD『蟻と宇宙』の中の曲『赤いのが欲しかった』）と言う歌詞があるけど、昨日（2018年10月14日）、僕も同じような体験をしました。

今から15年ほど前、洗礼を受ける前、聖書を初めて通読した時、テサロニケの手紙第二 3章10節に、「働きたくない者は食べるな」と書かれているのを読んだのです。

僕自身も母から「働かざる者食うべからず。」と言われて育てられました。

僕は、その当時（聖書通読を初めてした時）、働いていなかったので、この言葉が心に引っ掛かりました。

それで、聖書を通読して、しばらく経ち、教会へ通うようになってから、先輩の信徒の方にここの部分の解釈は、どうしたら良いのか聞いてみました。

そうしたら、その先輩の信徒の方は、そういう言葉が聖書にあることを知らなかったのです。

その信徒の方は、しっかり働いてきた方だったので、その言葉自体、心に残らなかったのだと思います。

この箇所の解釈が分からないまま、その後何年か経ちました。

それで、別の方にも、聞いてみました。

そうしたら、その方は「働かざる者食うべからず。」というのは、レーニンが聖書を悪用して言った言葉だと言っていました。

でも、その解釈については、その方も分からないようでした。

（そもそも、唯物論者のレーニンが聖書の言葉を使っているということ自体がおかしいのだが...。）

それで、昨日、『キリスト教綱要改訳版第４篇』を読んでいました。

そうしたら『キリスト教綱要改訳版第４篇』ジャン・カルヴァン著、渡辺信夫訳、第16章の「29」、381ページにこの箇所の解説が載っていました。

「働きたくない者は食べるな」という言葉は、全ての人に当てはまるわけでは無い、という意味のことが、書かれていました。

この箇所には、働くという行為は、例えば子どもには、当てはまらないと書かれていました。

なるほどと思いました。

このカルヴァンが書いた内容をふまえ、僕は、「障がいなどがあり、働きたくても働けない人には、この言葉は当てはめられない。」と解釈致しました。

僕の心に引っ掛かっていた疑問が、15年経って解決しました。

●キリスト教綱要第4篇、第17～20章

2019-01-17 22:18:19 | キリスト教綱要第４篇

＜2018年10月17日～2019年1月5日に読んだ箇所＞

「キリスト教綱要　改訳版　第4篇」

カルヴァン著

渡辺信夫訳

391～572頁

＜第4篇、第17～20章と訳者あとがき＞

今回の箇所には、サクラメントが２つだけ有効だと言うことが書かれていました。

洗礼と聖餐、の他は、サクラメントとして認められないと書かれていました。

＜読了感想＞

今回で、ようやく「キリスト教綱要」を読み終わりました。

約９年半の時間がかかりました。

気の長い話です。

途中、何度も読むのをくじけそうになりました。

一日、２ページ読むのがやっとと言う日もありました。

基本的にカルヴァンってプロテスタント神学の基礎を作った人です。

今となっては、プロテスタントでは当たり前になっている事柄が書かれています。

カルヴァンが生きていた当時は、きっと斬新な書物だったのでしょう。

なんか、この本を読んでいるとカルヴァンが目の前に居て、僕に熱弁をふるっているようにも思えました。

ま、とりあえず、読み終えて良かった。

**15.総説現代福音主義神学**

●総説　現代福音主義神学（再読）

2015-12-04 19:02:25 | 総説　現代福音主義神学

＜2015年9月20日～2015年12月4日に読んだ（再読した）箇所＞

「総説　現代福音主義神学」

宇田　進　著

全頁読みました

＜現代福音主義神学＞

この本は、以前、この「ふかごろうキリスト教神学日記」を書き始める前に読破して

おりました。

なので、今まで、この日記には、書いておりませんでした。

でも、最近、再読したので、感想を記しておこうと思います。

この本は、総説とあるように、神学の今までの流れや歴史を簡単にまとめてあります。

神学を本格的に記述するとなると、もっと多くの文章が必要になると思いますが、

この本は、的確に、様々な本を引用し、今までの神学の歴史を簡単に記述してあります。

また、これからの、福音主義神学の展望を記述し、本の記述が閉じられています。

神学書ではありますが、他の神学書に比べ、読みやすいと思います。

日本人の著者が書いてあるので、日本語が読みやすいのかもしれません。

福音派のクリスチャンで、神学を勉強したいと思っている人は、まず初めに、

この本を読んでみることをお勧めします。

**16.クリスチャンであるとは**

●クリスチャンであるとは

2016-01-16 16:24:06 | クリスチャンであるとは

＜2015年12月5日～2016年1月15日に読んだ箇所＞

「クリスチャンであるとは」

N.T.ライト著

上沼昌雄訳

全頁読みました

＜クリスチャンであるとは＞

この本は、最近、キリスト教内で注目を浴びている本だそうです。

キリスト教の入門書のようであり、それでいて、クリスチャン生活が長い人にとっても、信仰が刷新されるような感じを受けました。

キリスト教を斬新な切り口で説明してあります。

この本は、3部作の第１作目のようで、残りの２作も翻訳されましたら読んでみたいと思います。

**17.神を知るということ**

●神を知るということ

2017-02-16 17:16:39 | 神を知るということ

＜2016年5月4日～2017年2月14日に読んだ箇所＞

「神を知るということ」

J・I・パッカー著

渡部 謙一 訳

全頁読みました

＜神を知るということ＞

この本は、以前、「神について」と言う名前で出版されていたものです。

長いこと絶版になっていましたが、去年（2016年）改訂され、新しく出版されました。

内容は、クリスチャンの人向けです。

少なくとも５年以上、クリスチャン生活をしている人が読むと良いと思います。

特に、プロテスタントの福音派のクリスチャンが読むための本だと思います。

信仰が試されるような本です。

自分自身が不信仰に陥っていないか、この本を読んで考えてみると良いと思います。

**18.キリスト者の完全**

●キリスト者の完全

2019-02-25 16:43:33 | キリスト者の完全

＜2019年1月15日～2019年2月25日に読んだ箇所＞

「キリスト者の完全」

ジョン・ウェスレー著

藤本満訳

全頁読みました

＜キリスト者の完全＞

この本の著者のウェスレーは、聖霊のバプテスマを受けたのではないかという気がしました。

そしてそのまま、生涯、聖霊に満たされ続けたのではないかと思いました。

僕自身、昔、聖霊のバプテスマみたいな現象を体験したことがあります。

礼拝中に感動して涙が止まらないような状態になりました。

でも、その状態は長くは続きませんでした。

その状態は、その日だけでした。

**19.この世界で働くということ**

●この世界で働くということ

2018-04-26 04:08:02 | その他（信仰書）

＜2018年4月21日～2018年4月26日に読んだ箇所＞

「この世界で働くということ」

ティモシー・ケラー著

峯岸 麻子訳

全頁読みました

＜この世界で働くということ＞

この世界で働くことについて、キリスト教の視点から書かれていました。

非常に読みやすい本です。

かなり早く読み終わることができました。

主に仕えるように、心をこめて働きなさい。

他にも、色々、示唆に富んだことが書かれていました。

一般恩寵に関しても書かれていました。

クリスチャンじゃない人でも、すばらしい人はいる。

他の宗教の人でも、すばらしい人はいる。

こういう人は、一般恩寵にあるように、心に良心が刻み込まれている。

こういう人を尊重しながら仕事にあたることもできる。

自己実現を目的とした労働は、失敗する。

人のため、神様のため、自分以外のことのために働くことが、一つの目標になる。

キリスト教にあるように、高い倫理観をもって仕事にあたるように。

お金を目的としないように。

などなど。

ただ、この本の難点を言うと、クリスチャンじゃない人が読むと良く分からないのではなかろうか、と思いました。

そもそも、途中で読むのを挫折するのではないのでしょうか。

クリスチャン暦、１年以上で、聖書を１度は通読した人向けの本だと思います。

**20.キリスト者の標準**

●キリスト者の標準

2018-07-20 15:55:57 | その他（信仰書）

＜2018年4月10日～2018年5月20日に読んだ箇所＞

「キリスト者の標準」

ウオッチマン・ニー著

斉藤一訳

全頁読みました

＜キリスト者の標準＞

この本は、いつか読みたいと思っていた本でした。

絶版になっていて、入手困難でしたが、最近、復刊したので購入しました。

この本は、名著です。

クリスチャン向けの本です。

クリスチャンじゃない人向けの本ではないです。

この本を読むと、きっと信仰が強められるでしょう。

なんか、神様にフォーカスを当てて生きて行こうと言う気になりました。

ちなみに、この本、なんと実家にありました。

僕が生まれる前から、実家に置いてありました。

新しいのを購入してから、発見しました。

「全ての営みには時がある。」by 伝道者の書

きっと今回がこの本を読む時だったのでしょう。

それまで、実家の本棚にあったこの本は、僕の目から隠されていたのでしょう。

すっごく不思議に感じます。

でも、いい本でしたよ！

# **21.ふかごろう神学・あとがき**

●ふかごろう神学・あとがき

『ふかごろうキリスト教神学日記』を書き終えるにあたり、何をあとがきに書こうか、色々考えていました。

今、私、ふかごろうが一番言いたいことはなんだろうと。

それで、一つのフレーズが私の頭に浮かびました。

それは、

「働かざる者、食うべからず」

と言う言葉です。

共産主義者、レーニンはこの言葉を世に残しました。

私は、この言葉を打ち消そうと思います。

それでこう言いたいです。

「働かなくても、食べていい」

もう少し言うと、

「働きたくない者も、食べていい」

と言いたいです。

これは、レーニンが参考にした、聖書に書いてある言葉、

「働きたくない者は、食べるな」

（第２テサロニケ3章10節）

と言う言葉と真逆のことです。

私は、この聖書の言葉を打ち消そうと思います。

この言葉は、パウロが残したのですが、これは間違っていると断言します。

多くの人がこの言葉で苦しみました。

人類に対する呪いの言葉となっていると思います。

私は、この言葉の呪縛を解きたいと思っています。

この労働に関する呪いは、元々は、創世記3章17〜19節に出てきます。

「大地は、あなたのゆえにのろわれる。あなたは一生の間、苦しんでそこから食を得ることになる。

大地は、あなたに対して茨（いばら）とあざみを生えさせ、あなたは野の草を食べる。

あなたは、顔に汗を流して糧を得、ついにはその大地に帰る。」

この呪いを私は解きたいと私は思っています。

西暦2020年現在、人類は、働きたくない者でも、生きていける社会を作るべきではないだろうかと思っています。

現在でも、その社会は、少しずつ実現できていると思います。

例えば年金や生活保護などの制度があります。

そういう社会の実現をもっと推し進める必要があると思います。

ただ、急に皆が働かなくなると、皆が困ることになると思うので、こういう改革をするには時間が必要だと思います。

ゆっくりと時間をかけて社会を変えてゆく必要があると思います。

また、労働力に関しては、テクノロジーの進化によって、それを補っていくことが可能になるのではないかと思います。

例えば、今、私の家の近所の洋服屋では、レジのシステムが自動化されています。

また、近所のスーパーでも、レジがかなり進化しており、半自動になっております。

さらに、AI（人工知能）や5G（通信規格）の発展により、自動車の運転も、だんだん自動化されていくと思います。

あと、社会の変革以上に大切だと思われるのが、人々の意識の問題だと思います。

人々が働かなくてはいけないと強く考えているなら、社会の変革もなかなか前に進まないような気がします。

人々の意識改革も必要だと思います。

ここで、はっきり言いたいと思います。

働きたくない人は、働かなくてもいいんです。

このことをキリスト教の神学でどのように考えるのか、考察してみようと思います。

パウロは、

「働きたくない者は、食べるな」

との言葉を残しましたが、これは、当時主流だった考え方を言ったに過ぎません。

いわば、良識的に言った言葉です。

新約聖書に書かれているからと言ってそれが全て正しいとは限りません。

この言葉、「働きたくない者は、食べるな」は、例えば、子どもには当てはまらないと思います。

また、年老いて、体力のなくなった人にも当てはまらないと思います。

また、一部の労働することが困難な障がい者にも当てはまらないと思います。

また、就職活動を何回しても、職にありつけない人は、どうすればいいのでしょうか？

死ねと言うのでしょうか？

まあ、死ねと思っている悪魔のような人もいるとは思いますが。

えっと、話がそれました。

神学的にどうかと言うことですね。

これは、聖書の無謬性（むびゅうせい）とか、無誤性（むごせい）の問題になると思います。

「聖書は原典において誤りなき神の言葉である」と言う、神学的な思想の問題です。

私は、聖書には、間違いがあると思っています。

なので、私は、聖書の無謬性や無誤性は否定します。

この点で、私は、キリスト教の福音主義者ではないと思います。

パウロは、神じゃなく、我々と同じ人間です。

間違いも犯します。

多くの点でパウロは素晴らしいことを書いて残しました。

でも、間違いも残しています。

例えば、パウロは、女性に対する差別のような文章も残しています。

「女の人は教会では黙っていなさい。彼女たちは語ることを許されていません。」

（第１コリント14章34節）

また、パウロは、同性愛に否定的な文章も残しています。

「男たちも、女との自然な関係を捨てて、男同士で情欲に燃えました。男が男と恥ずべきことを行い、その誤り対する当然の報いをその身に受けています。」

（ローマ1章27節）

私は、この２つのことに対しては、パウロは間違っていると思います。

ただ、この２つのことに関しては、ここでは論じないでおこうと思います。

私は、労働についてだけ、ここでは論じようと思います。

私が、この世に生を受けて生まれたのは、パウロの、この労働に関する考え方の間違いを指摘するためだったとも感じています。

私は、西暦2002年に、エンジニアの仕事を辞めてから、2020年の現代に至るまで、18年間一般就労はしていないです。

障がい者向けのいわゆる作業所と呼ばれているところでは、10年以上働いていました。

法定の最低賃金をはるかに下回る、工賃を貰って働いていました。

でも、それは一般就労とは言いません。

私自身の経験として、一般就労していない期間が長かったのです。

この経験は、私の思想に強く影響しています。

働きたくても働けない、そういう環境に長いこと居たのです。

何年かして、一般就労の意欲もあまり無くなってしまいました。

もしかして、神様は、私に一般就労することを望んでないのではないのかとも思いました。

それで、一般就労していない、この18年間、私は哲学書や聖書、神学書を読み漁りました。

その結論として、

「働かなくても、食べていい」

と言う１つの言葉を残したいと思うようになりました。

そもそも、2003年に、初めて聖書を通読した時に、心に引っかかった言葉が、

パウロの「働きたくない者は、食べるな」と言うものでした。

最初に読んだ時、すでに、「なんだこれ？」と思っていました。

その時は、まだ作業所にも通っておらず全くの無職でした。

おかしいと思っていました。

それから15年ほど経過した後、その疑問が解けました。

その時カルヴァンの『キリスト教綱要』を読んでいました。

カルヴァンは、『キリスト教綱要』に、

「 働きたくない者は、食べるな」

と言う言葉は誰にでも当てはまるわけでは無いと、わざわざこの聖句を引用して書いていました。

--------

「使徒は働く人にしか食べることを許さなかったが（IIテサロニケ 3:10）、この理由の下に子供たちから食物を取り上げるなら、万人から唾棄（だき）されるに価しないだろうか。なぜそうなるのか。それは、特定の種類の人間と特定の年齢について言われたことを、無差別に全ての者に禁じるからである。」

『キリスト教綱要改訳版第４篇』ジャン・カルヴァン著、渡辺信夫訳、

第16章の「29」、381ページより引用。

--------

私は、カルヴァンよりさらにもう一歩踏み込んで、

「働かなくても、食べていい」

と言いたいです。

それが、私が18年間、一般就労していないという経験と神学書などを読んで思ったことです。

ふかごろう神学と言うものがあるならば、この１つの言葉をその神学の要約としたいと思います。

シンプルにこの１つのことを、ふかごろう神学の真髄として残したいと思います。

有名な哲学者、例えばデカルトも、

「コギト・エルゴ・スム」（我思う。ゆえに我あり。）

と言う言葉を残しました。

哲学書を大量に残しても、多くの人の心に残るものは、１つの言葉だったりします。

私は、デカルトには遠く及びませんが、この１つの言葉、

「働かなくても、食べていい」

を後世に残せたら良いと思っています。

もちろん、働きたい人は働けばよいとも思っています。

それを、制限するつもりは無いです。

最後に、湯浅誠さんが次の言葉をテレビおっしゃっていました。

今、世の中は、

「“やさしさ”に対して“やさしく”なった」と。

そして、今後の目標として、湯浅誠さんは、

「“やさしさ”に対して“よりやさしく”なる」

とおっしゃっていました。

『Eテレ　ハートネットTV　シリーズ　コロナの向こう側で③

１億分の１としてできること　～湯浅誠～』

2020年6月3日（水）PM8:00放送より。

「“やさしさ”に対して“よりやさしく”なる」と、私もそう思います。

労働に関連して起こる問題、弱肉強食とか、拝金主義とか、パワハラとか、いじめとか、もう止めた方が良いと思います。

そんな中で働く必要はないです。

再度、次の言葉を記しておきます。

「働かなくても、食べていい」

ということで、これであとがきを書くのを止めたいと思います。

これを読んでくださった方々に、感謝します。

ありがとうございました！

2020年6月20日（土）　ふかごろうこと、深澤信行

# **22.著者紹介**



本名：深澤信行（ふかさわ　のぶゆき）

特にどこにも所属していないフリーのクリスチャン

統合失調症患者

1973年神奈川県相模原市生まれの男性

妻子あり

2004年4月11日キリスト教プロテスタント福音派の教会で受洗

日本工学院八王子専門学校卒業

第一種情報処理技術者

元システムエンジニア

HP：　http://fuka.moo.jp

E-mail：　f@fuka.moo.jp

ハンドルネーム：ふかごろう

＜版の情報＞

ふかごろうキリスト教神学日記　第２.３版

2020年6月22日 発行

発行者：深澤信行

＜著作権保持者＞

深澤信行 2020年

© Nobuyuki Fukasawa 2020